

いわ せ てん じん
富山市岩瀬天神遺跡
発掘調査報告書

2002

富山市教育委員会

いわ せ てん じん
富山市岩瀬天神遺跡
発掘調査報告書

2002

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市岩瀬古志町7番地に所在する岩瀬天神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は海岸整備計画に伴うもので、富山県（土木部港湾課）の依頼を受け、富山市教育委員会が富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て実施した。
- 3 調査期間及び調査担当
 - 試掘確認調査　昭和63（1988）年9月24日～昭和63年10月12日
 - 担当　古川知明（富山市教育委員会）
- 第1次発掘調査　平成4（1992）年10月28日～平成4年12月21日
 - 担当　古川知明、小林高範（同）
 - 指導　宇野隆夫（富山大学人文学部教授：当時）
- 第2次発掘調査　平成5年9月16日～平成5年11月19日
 - 担当　古川知明
 - 指導　宇野隆夫（富山大学人文学部教授：当時）
- 第3次発掘調査　平成7年10月23日～平成7年12月6日
 - 担当　古川知明　　調査員　高橋浩二（富山大学大学院：当時）
 - 指導　宇野隆夫（富山大学人文学部教授：当時）
- 出土品整理　平成13年5月21日～平成14年3月28日
 - 担当　古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
- 4 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。
甘粕 健、安念幹倫、宇野隆夫、岡本淳一郎、岸本雅敏、久々忠義、小島俊彰、酒井重洋、神保孝造、関 清、高橋浩二、前川 要、濱 明、南 久和、宮田進一、宮田明、桃野真晃、富山大学事務局、富山大学人文学部考古学研究室、北陸財務局富山財務事務所、富山県管財課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山市岩瀬地区センター（順不同、敬称略）
- 5 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆は、III-4-(1)-(①)～④、IV-2を宮田明、III-4-(3)須恵器を小黒智久（富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員）、その他を当センター職員の協力を得て古川が行った。

目　　次

I　遺跡の位置と環境	1
II　調査の経緯	4
III　調査の成果	11
IV　まとめ	45
写真図版	51
報告書抄録	63

I 遺跡の位置と環境

岩瀬天神遺跡は、富山市街地の北約8kmの富山市岩瀬古志町地内に所在する。

富山平野の中央を流れる神通川の右岸河口には海岸砂丘が形成されており、一体は岩瀬浜と呼ばれている。遺跡はこの海岸砂丘上に立地する。標高4mを測り、周辺の低地とは1m余の比高差がある。現在の神通川河口とは約1kmの距離にある（第1図）。

遺跡周辺は海岸整備や工場建設のため大規模な地形改変を受け、海岸砂丘地に往時の面影をみるが、これも大きく変化しているようである。

旧地形の復元には大日本帝国陸地測量部による明治43年測図仮製版2万分の1地形図が有効である（第2図）。明治43年地形図と現在の岩瀬天神遺跡をあわせてみると、遺跡は天神松周囲の延長800m幅400mの小高い砂丘上に乗っており、遺跡の東端には砂丘を突き破って海へ流れる小河川が存在していた。当時の標高は5m弱で現在とほぼ同じである。

等高線の観察から、遺跡南側のA地点は湿地とみられる。神通川左岸のB地点は旧河道跡であり、神通古川と呼ばれている。砂丘手前には潟湖が形成され、彦助潟と呼ばれた。C地点も神通川旧河道で、大きく蛇行している様子を示している。E地点の南方の鍋田には常願寺川起源の潟湖が形成され、フゴ（富居）や江（赤江）の地名に痕跡を残している。その潟湖から北流する流路はD地点からE地点を経由して富山湾に注いでいたとみられる。F地点は神通川の自然堤防に由来する微高地で、旧流路に沿って北西側と北東側に高台が続いている。以上のように概観できるが、それぞれが形成された年代は不明である。

周囲の遺跡をみると（第1図）、立地状況から、海岸砂丘上に立地するもの、砂丘内陸側の微高地に立地するもの、河川の自然堤防・低位河岸段丘上に立地するものに分けられる。



第1図 岩瀬天神遺跡(1)と周辺の遺跡(1:50,000)

遺跡の出現は縄文時代中期後葉の串田新式期で、今市遺跡、宮町遺跡など海岸部から内陸にはいって存在する。これらは断片的である。後期から晩期には海岸部を含めほぼ全域に分布する。晩期後半の豊田遺跡（富山市教委1974）では土坑3基の検出があり、炭化したオニグルミや焼けた骨、焼けた礫が出土した。ほかに石底丁形の石器や打製石斧の存在から、低湿地における農耕の存在の可能性が指摘されている（富山市教委前掲、小島1987）。

弥生時代には中期以降遺跡分布はさらに密になる。内陸の宮町遺跡では玉作りを行い、緑色凝灰岩製管玉やヒスイ製勾玉製作を行っていたほか溝への土器廃棄がみられた。豊田遺跡では溝群が検出されている。この溝の性格は不明だが、墓域を区画する溝の可能性がある。海岸部の日方江遺跡では墓壙とみられる円形土坑群がある（富山市教委1989）。海岸から少し入った四方地区では、江代削遺跡（富山市教委1988）で堅穴住居や溝、四方背戸削遺跡（富山市教委2000）で溝が検出されており、集落の形成を見ることができる。その規模は大きなものである可能性が高い。

古墳時代には海岸部の遺跡は見られないが、弥生時代の遺跡の大半は古墳時代前期まで継続して営まれる傾向にある。江代削遺跡では弥生後期の集落は洪水などにより埋没したとみられ、その後古墳時代に再び集落が形成されている。豊田地区にはちょうどよう塚がある（岡崎1972ほか）。この古墳は前期の方墳で、一辺21~22m、高さ約4mの規模をもつ單独墳である。発掘調査では赤彩土器、底部穿孔壺など祭祀色の強い土器が出土している。

古墳に近接する豊田大塚遺跡では湿地の肩部に祭祀土器の廃棄が認められている（富山市教委1998）。ちょうどよう塚古墳はこれら弥生時代以来の濃密な遺跡形成を背景として台頭した地城首長の墓と位置づけられる。

古代・中世の遺跡が多い。特に平安時代前期には中核的な集落形成がある。宮町遺跡では道路跡とこれに接する掘立柱建物群や石製鈎帯が検出され、志麻郷関連の官衙施設と推定されている。今市・八幡・寺島・布目地区では300haにもおよぶ広大な遺跡形成があり、中でも米田大覚遺跡では整然と配置された掘立柱建物群や祭祀を伴う井戸、石製鈎帯や「道公」「柴」「桑」「真」「中」などの墨書き土器200点以上が検出されており（富山市教委2000）



第2図 明治43年地形図(1:40,000) 網点は遺跡、等高線は太く引き直したもの

ほか)、平安期新川郡都とする見方がある(藤山2000、堀沢2001)。豊田大塚遺跡はその祭祀場と考えられ(堀沢2001)、さらに蓮町遺跡を磐瀬駅家とする見方もある(藤山2000)など、平安期には注目すべき遺跡が多い。

中世前期の史料として、鎌倉時代に成立したとされる廻船式目に掲げられる三津七湊のひとつに「越中岩瀬湊」がある。この岩瀬湊の位置については未だ明らかではない。現在岩瀬には、神通川をはさんで岩瀬町のある東岩瀬と四方東部にある西岩瀬がある。江戸前期の万治元年(1658)及び寛文8年(1668)の2度にわたる神通川大洪水以前は西岩瀬側が神通川河口港として発達していたことから、越中岩瀬湊を一般的に西岩瀬と理解しているが根拠は薄い。十三湊を始めとする中世日本海沿岸の港湾遺跡は、多くの場合自然の潟湖を利用し、そのほとりに港町の町屋群を形成している。このような観点からすると、大洪水以前の流路と推定される古川(第2図B)の河口には彦助潟に名残をとどめる潟湖が形成されており、これを望む西岩瀬に港町が形成されていた可能性が高く、そのエリアに含まれると考えられる四方北窪遺跡(富山市教委1998ほか)や四方荒屋遺跡(富山市教委1999)では中世前期の集落跡が確認されている。しかし一方では都市経営の母体である城館(東岩瀬城)が存在する東岩瀬地域がより港町的色彩が強いとする説もあり、その位置について今後の研究成果が待たれる。

中世後期には海岸部に平城が築かれる。岩瀬町には東岩瀬城、海岸通地内には大村城、その東の日方江地内には日方江城がある。東岩瀬城は現在密集した住宅の下にあるとおもわれるが位置は定かではない。文書史料からは戦国期の成立と見られるが、越中守護桃井直常が天授6年(1380)ここで自害したとの伝承から南北朝期に遡るとする説もある(塩1972)が確証はない。大村城は堀跡とみられる水田や古城跡割などの小字が残る。豊田豈後守の居城と伝え、越後上杉勢に対する防御の城として、飛び团子伝説を残すなどしている。日方江城は江上重左衛門が拠ったとされ、天正年間佐々成政勢に攻められたと伝える。

両城の位置は第2図が示すように鍋田周辺の潟湖から流れ出る河川出口のE地点であり、この河川(現在は久保田川として名残をとどめる)を挟んで両城が対峙していたとみられることから、400mという極めて近接して存在することも理解できる。

中世末から近世前期には、神通古川河口右岸には千原崎遺跡が形成される。遺跡は16世紀末に成立し、17世紀中頃まで継続した後、17世紀中ごろにいったん途絶し、17世紀後半に再び営まれて18世紀前半まで続く。17世紀中ごろは先に述べた万治元年(1658)及び寛文8年(1668)の2度にわたる神通川大洪水の時期にあたり、この洪水による集落の流失・途絶を反映しているものと考えられる。前期の集落からは越中瀬戸が多く出土し、特に皿類が多い。他の消費遺跡に比べ越中瀬戸の占める割合が高いことは、ここが越中瀬戸の流通における集積地であったことを想定させる。後期の集落はやや遺物が少なく集落規模が縮小したとみられる。越中瀬戸が少くなり、唐津や伊万里などが増える。

千原崎には寛文9年(1669)～延宝2(1674)の間に、加賀藩営の渡し場「千原崎の渡」が設けられる。千原崎遺跡の後期集落はこの年代に成立したもので、渡し場の東岸周辺に設けられた宿場的な町屋構造群と評価することができようか。

なお、神通川左岸河口の北陸電力火力発電所のバイオライン掘削時には多くの縄文～中世の土器が出土しており、現在整理中である。

(古川)

II 調査の経緯

1 既往の調査・研究

遺跡は、1935（昭和10）年濱辰氏（元富山考古学会会長）が『考古学』に発表した「越中に於ける陸奥式土器」で初めて紹介された。遺跡は岩瀬海岸の汀線から150mの砂丘上、標高2.5mの微高地に位置し、昭和初年の防風林植樹の際に浜が小松の根周りに置いた土の中から土器を発見した。その土はそこから南に少し離れた通称「さんまい」と呼ばれる地点から運ばれたもので、その地点は周囲の水田から1mほど高いという。そこには火葬場があり荒らされていたが、地表からは50cmの深さの黒色土中から出土することを確認したという（濱1972ほか）。その場所は現在東京タンクステン工場敷地となり当時の面影は認められない。

濱氏の4か年にわたる採集の結果、天神遺跡の遺物として約20点の土器が採集された。『考古学』には4点の縄文晚期土器が掲載され、羊齒状文のある当時陸奥式と呼ばれた東北日本晚期土器様式を「天神B式」として型式設定した。この天神B式は、陸奥式と呼ばれた東北日本晚期様式に含まれつつも、北陸的な地域性を持った土器型式として位置づけられた。これが後の「岩瀬天神式」にあたるが、かなり広義の内容となっている。

岩瀬天神遺跡の発見の経緯については、濱辰氏が『大境』第14号に「10代の思い出」としてつづられた中に記されている。「天神遺跡の発見の端緒は遺跡を離れた砂丘上であった。風による流砂を防ぐために砂丘上に広い範囲にわたり小松が植えられており、その小松を活着させるため、小松の根の回りに置いた腐植土に縄文土器があるのを見ついたことに始まる。その土壤のもとをたぐっていって旧火葬場、通称さんまいと言われる、県道より少し南の田んぼより1m程高い独立微高地にたどりついた。勿論火葬場として使うためにかつて工作が行われており、包含地は、わずかしか残っていなかった。しかし嬉しかった。然も出土土器が朝日貝塚の或る地点（後にB点と称す）に類似していたので意を強くした記憶がある。」とある。

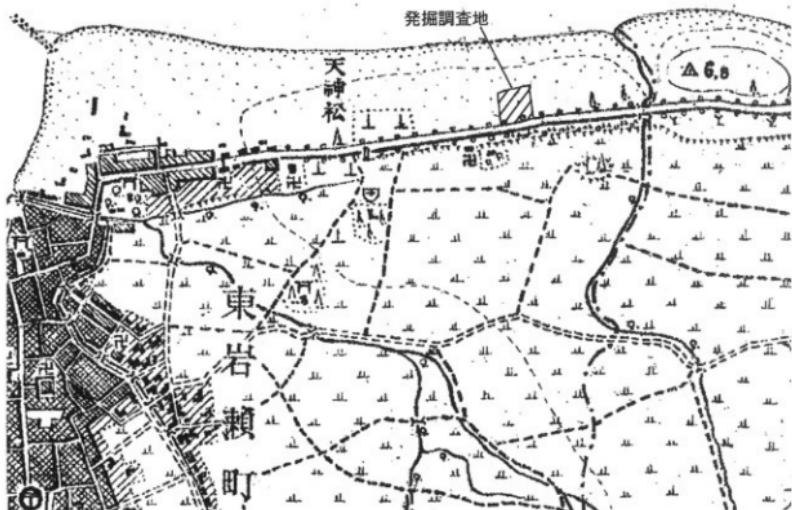
1936年早川莊作氏は『越中史前文化』に上新川郡東岩瀬町天神地内から打製石斧・磨製石斧・石鎌・砥石・縄文（薄手式）土器・弥生土器の出土を報告している。図版に掲載されたのは八戸市新保式と思われる土器片2点で、写真と拓本で示してある。

1951年森秀雄氏は『大昔の富山県』地名表に弥生土器出土と記載している。

1962年早川莊作氏は『富山県の石器と土器』の中で、岩瀬天神遺跡を縄文晚期・弥生遺跡として取り上げ、「石斧・石鎌・石鎌・土器（弥生式縄文）」の出土を記している。掲載された写真は縄文土器片1点のみで、『越中史前文化』に掲載したものと同一である。

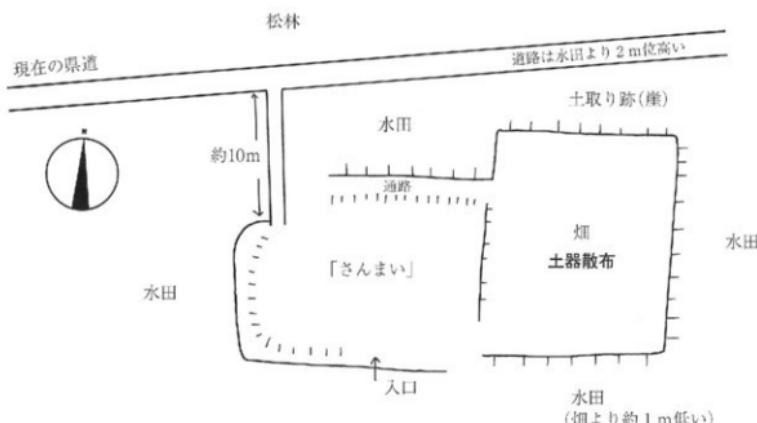
1965年文化財保護委員会発行『全国遺跡地図（富山県）』に「503 古去遺跡」として掲載されたが、富山県台帳によると「古志遺跡」であり、印刷時の誤植とみられる。

1967年出崎政子氏は『大境』第3号に「北陸地方の縄文時代晚期について（I）」を発表し、濱氏が採集した岩瀬天神遺跡出土の土器26点を紹介し、初めて詳細に「岩瀬式」の内容が明らかにされた。岩瀬天神遺跡出土の土器には、はりこぶとすり消し縄文を施す一群と、入組み帯縄文と未発達な三叉文状の文様を施す波状口縁深鉢の一群があり、前者は東北地方の影響を受けたものであり、後者は文様帶の構成などに西日本の要素を取り入れられて融合した形態のものと理解され、縄文後期末に位置付けられた。この後者を



第3図 明治43年地形図より(1:10,000)

斜線部分が発掘調査区。湊氏が採集した地点はほぼ現在の発掘調査区にある。「さんまい」は道路南側の寺辺りと推定される。



第4図 湊慶氏による略図

もって「型式として設定しにくいが特色あるグループであることは認めてよい」とし、仮称付きながらも「岩瀬式」と表記している。これは現在の「岩瀬天神式」の内容と合致するものである。これらの分布は地域的にはほぼ庄川以東とされた。また同じ号で、濱氏と出崎氏が「岩瀬天神遺跡出土の特異な土製品」として人面付き土器の顔面部分とみられる土器片が報告された。

また同年高岡工芸高等学校地理歴史クラブによる高岡市勝木原オジャラ遺跡の発掘調査報告書が刊行され、晚期初頭の土器型式として「勝木原式」が設定された。勝木原式は石川の縄文晚期初頭の八日市新保式と並行関係にあり、地域差と理解された。そして「所謂「岩瀬式」」はその前段階の型式と位置づけられている。

1972年『富山県史』考古編では、濱氏が後・晚期について解説を行い、勝木原遺跡で「岩瀬式」を八日市新保式以前に置いたことに対し、後期末の位置付けと解釈し、晚期初頭におくべきと反論している。その根拠などは明らかにされていないが、ここで濱が「岩瀬天神型」なる名称を使用したのは、型式をなす内容に不足を感じていたからと思われる。岩瀬天神型なる内容は、「頸部上をみたす縄文、半肉彫的な磨消部、左右対称とせず巻き込み文様を主とする波状口縁の波頂部、波頂を上から圧して内にわずかにひねりをつくり、器内に有段の深鉢」としており、深鉢文様の限定的な様相と捉える。濱氏は県内における縄文土器編年が亀ヶ岡文化との関連において縄文晚期から始まったことに意義があるとし、その魅となつた本遺跡の資料に対しても晚期という年代観に強い意識を持たれていたのではないかだろうか。後段の遺跡解説・図版では、岩瀬天神遺跡出土品として縄文後・晚期の土器37点、石冠1点、石鋸（擦切石器か）1点が掲載されている。この中には早川が過去に報告した資料は含まれていない。本文中の記載には他に、弥生土器・土師器・須恵器・砥石・石錐・土偶・土錐様装飾土器（有孔球状土製品）の出土があるとしている。

1976年『富山県史』通史編I原始・古代においては、晚期初頭の県内土器型式として「岩瀬天神式」なる名称が正式に定義された（岡崎1976）。基本的には出崎氏が1967年に発表した「仮称岩瀬式」の内容と変わらない。この型式は三叉文を基本とし、「半肉的な曲線と、その間を埋める磨消し縄文、曲線の間に入れられた三叉文によって飾られている」もので、器形については、波状を示す口縁頂部が内側にひねりを作り、口縁下方は段をなして頸部につながるものとしている。このような器形・文様は、「東北地方の晚期初頭（大洞B）の様式が、西からの影響も多少うけながら入りこんだ」ことによる変化とした。この表現は出崎氏が岩瀬天神式における西日本的な要素について言及した内容からすればややトーンダウンしているように見受けられる。

1991年北陸自動車道建設にかかる朝日町境A遺跡出土の土器についての報告書が刊行され、後期から晚期土器の豊富な資料が提示された。この中で岩瀬天神式は富山県にのみ存在し石川県に存在しないことで、両地域の編年が一致しない状況であると述べている。そして、器種の組成が八日市新保式と異なる理由を「八日市新保式と岩瀬天神式・勝木原式を分けたため」とし、八日市新保式の新しい段階では両者が共存すると見られるため、勝木原式の段階を再検討する必要があるとの見通しが立てられた。

翌年、同遺跡報告書の総括編が刊行され、後期中業から晚期の土器について酒井重洋氏が研究史もふまえてまとめている。そのうち晚期前業の深鉢は6段階に変遷し、玉抱き三叉文は第4段階に出現する。酒井氏の分類によると勝木原式がやや新しい様相が認められ

ものの、岩瀬天神式と勝木原式はほぼ並存するとし、型式設定の内容について疑問が呈された。

1993年『富山市史』上巻に掲載された縄文土器10点はいずれも湊氏所有のもので、県史考古編に所収のものと同一である。

1992~95年の発掘調査中、湊氏に経緯を尋ねた際、富山大学学生宿舎があった昭和20年代に宿舎の学生が縄文土器を探集し、それを見た記憶があるということで、後日湊氏に東京在住の元学生に土器の有無を確認していただいたが、所在不明ということであった。

2 湊氏の回顧と資料

岩瀬天神遺跡周辺は、先に述べたように、戦後大きな開発が相次ぎ、遺跡発見当時の地形は残されていない。岩瀬天神遺跡の理解のため、この遺跡の最初の発見者である湊氏に当時のことを回顧していただいた。またこれまで出崎氏の報告以外資料化されていなかった採集資料を記録することについて湊氏の快諾を得ることができた。聞き取り及び採集資料の取りまとめを進めるに当たっては小島俊彰氏(富山考古学会会長)にその労をとつていただいた。厚く御礼申し上げます。

凡そ内容は先述の『大境』第14号のとおりだが、幾つかの点で具体的な知見を得た。湊氏の資料の採集地は今回調査地周辺であり、明治43年地形図に調査地を重ねてみると第3図に示す位置になる。当時も砂丘地の只中であり、道路に沿って松並木が植えられており、道路のすぐ南には崖線が認められる。周辺には標高2.5mの等高線が存在し、5m以下を示しており、4~4.5mを測る現在とさほど変化はない。調査地の東250mには小河川が砂丘を切って富山湾に注ぎ、その東側には標高6.8mを示す三角点と小高い砂丘地形が認められるが、現在は削平され存在しない。

湊氏が突き止めたという、本来の遺跡所在地と推定される「さんまい」という場所の略図を湊氏に書いてもらつたものが第4図である。さんまいは遺物採集地点の南側の道路(現県道富山魚津線)から約10mほど入った地点にあたり、その部分は土壘状の高まりで囲われていたという。明治43年地形図で該当しそうな場所を確認すると、発掘調査地の南西に寺院マークと松の存在する区画があり、湊氏の記憶とも一致する地点と思える。そうすると、湊氏が採集した昭和初年には寺院の建物はすでになくなつており、さんまいの地名のみが残っていたものとみられる。また松のあったところは開墾され、畑になつていたと考えられる。遺物はその畑でも採集され、縄文土器や土師器などがあり、50cmほど遺物を含む砂質の黒色土が残っていたという。畑は周囲の水田から1.5mほど高かったという。

また発見当時、周辺を広い範囲踏査したが、さんまい以外には遺跡らしいところを発見することはできなかつたといふ。

湊氏が遺物を採集した県道北側では、起伏のある砂地に高さ10cmほどの松の苗を四角い竹のヨシズで囲むものもあり、その根元にさんまいから黒土を持ってきて活着させていた。その黒土に土器



湊氏 (2002年2月21日撮影)

が混じっておりそれを採集したものである。苗はキチンと密に並んでおらず、ランダムな配列であったという。ここで採集された資料は約400点に上り、それらのほとんどは県道北側での採集である。

採集された資料の大多数は縄文土器で、ほかに土偶2点、弥生～古代の土器数点、古代の土錐2点、貝殻1点などがある。大境で報告された人面付き土器は濱氏が最初に採集された資料で、裏面に「昭、五、四」と墨で注記があり、濱氏に確認したところ、昭和5年4月に採集したものであった。

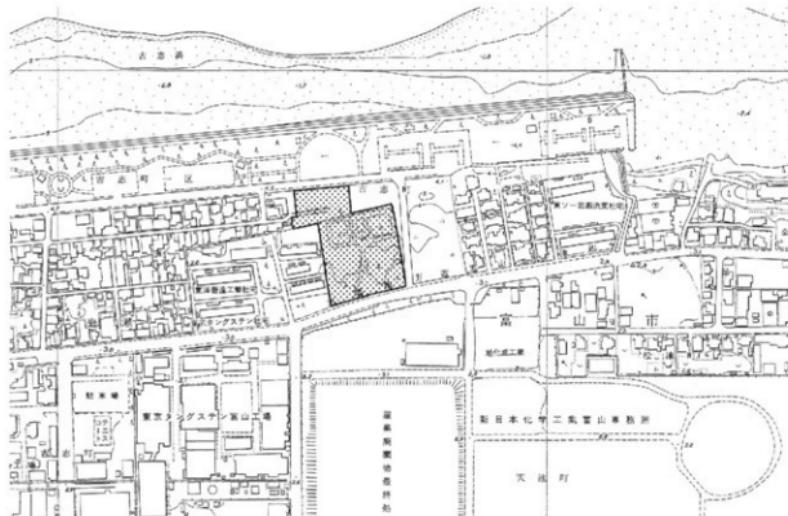
3 発掘調査にいたるまで

調査対象地は富山市岩瀬古志町7番地である。

調査時点では海岸に面する防風林地であり、砂地上に樹齢数十年のクロマツがまばらに生えていた。

この土地は1940年民間工場の社宅として開発され、その後富山大学が購入し薬学部学生宿舎として使用したが、1965年取壟し、その後艇庫が設置されたが取り壟され、現在に至って遊休地となっている。この利用について大学と富山県で協議中であった。

1987年1月、富山大学より富山県埋蔵文化財センター及び市教委に埋蔵文化財の所在について照会があった。当時の市遺跡地図（1976年版）においては、対象地は遺跡範囲から外れていたが、同月富山考古学会会長（当時）であった濱氏に確認したところ、富山大学宿舎であったところから土器が出土したことがあったという回答を得た。このことから遺跡に含まれる可能性が高いとして、同年3月富山大学にて埋蔵文化財包蔵地として取扱う旨通知した。

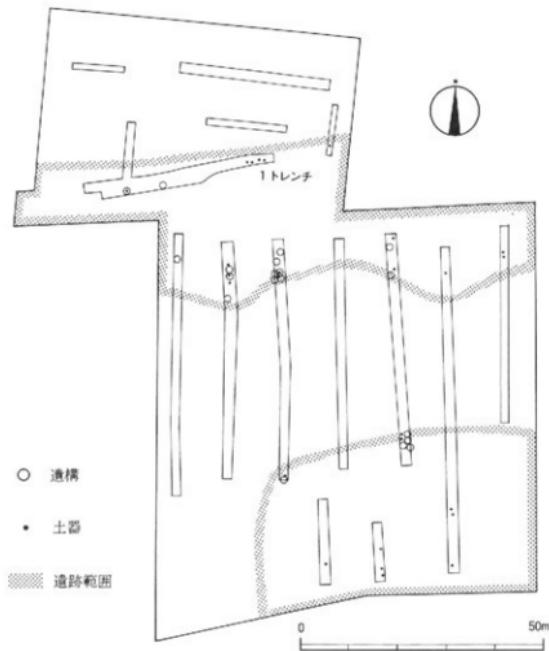


第5図 昭和63年度試掘確認調査地(1:5,000) 調査点が調査対象範囲

これを受けて富山大学は富山県と協議し、県が進める海岸整備（岩瀬海浜公園）事業にこの土地を取込んで整備するという方針で合意し、富山県が海岸整備事業における公園整備計画に基づき、同年10月市教委に試掘確認調査について協議を行った。この際、隣接する大蔵省（当時）所管の土地についても同様の状況あることから、北陸財務局富山財務事務所からも併せて調査を行う旨依頼があり、全体の窓口は富山県管財課・港湾課することとした。

試掘確認調査は1988年秋に実施が希望され、同年9月に市教委に対して調査依頼書が提出された。調査は市教委が主体となり、1988年9月24日から同年10月12日にかけて8,510m²を対象に行った。この調査費用は富山県が負担した。調査は15ヶ所のトレンチを設定し、計1,060m²の発掘を行った。全面積に占める試掘割合は12.5%である。

調査の結果、過去の施設建設などで大きく攪乱を受けているものの、2つのブロックで計4,000m²に遺構の所在を確認した。北側ブロック2,110m²では地表下15~40cmに14基の小ピット、南側ブロック1,890m²では地表下40~60cmに5基の小ピットがあり、いずれも灰色粗砂の地山上に構築されていた。ピットの直径は平均20~30cmで、円形を基調としている。遺物は、縄文時代後期後半~晚期前半の土器約90点のほか、弥生~古墳時代の土器1点、珠洲焼1点がピット内および砂層から出土した。



第6図 試掘確認調査位置図(1:10,000)

ピットの埋土となっている黒色の砂質腐植土は、ピット内以外には認められず、自然堆積による遺物包含層は存在しなかった。

以上の状況により、ピットは中世以前に構築されたものであり、遺物包含層の欠失は、砂丘地という特性と工事・植林等による攪乱のためであると理解され、ピットの存在する範囲4,000m²を遺跡として取り扱うこととした。

なお、所有者別内訳は富山大学敷地3,120m²、大蔵省敷地880m²である。

試掘確認調査の結果は同年10月17日付けで県へ通知した。確認された遺跡部分の保護措置については、同年10月28日に県管財課・県埋文センター・市教委の三者で協議し、発掘調査が必要とされた。

しかし調査体制等に関して

協議が整わなかったため1991年度まで協議を続け、1992年度から富山大学敷地を対象に6か年計画で調査に着手し、その後出土品整理を実施することで合意に至った。この際調査は市教委が主体となり、市学芸員が担当し、富山大学人文学部考古学研究室から院生・学生の派遣を得て対応することになった。調査に先立って、調査方針等に関する全体説明会を市教委が行って参加予定者全員の共通理解を図った。

4 発掘調査の経過

発掘調査は、富山県港湾課の依頼を受け、富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て富山市教委が実施することとなった。

第1次調査は1992年度に実施した。敷地の北西部500m²を対象とし、1992年10月28日から同年12月21日の間に40日間を要した。試掘調査結果に基づき調査を進めたところ、当初の遺構検出面の下約20cmにさらにもう1枚下層の遺構検出面が存在することが明らかになつた。下層の調査面積は170m²であり、延べ670m²の調査を行つた。

第2次調査は1993年度に実施した。第1次調査区の東側500m²を対象とし、1993年9月16日から同年11月19日の間に30日間を要した。下層は全面に存在し、延べ調査面積は1,000m²となつた。

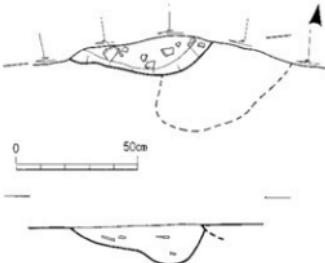
1994年に第3次調査が予定されたが、県側の事情により翌年度に見送られた。

第3次調査は1995年度に実施した。第2次調査区の東側335m²を対象とし、1995年10月23日から同年12月6日の間に13日間を要した。上層部分の調査が完了した時点で富山大学生のカリキュラムの都合により調査の続行が困難となつたため、下層調査を断念し、遺構部分に厚さ5cmの砂をかけて保護し、ブルーシートで被覆した上に10cm砂を敷き詰めて保全した。したがつて下層150m²は未調査のまま残された。

その後調査は中断され、2000年3月に富山県が事業計画の中止を決定したため、発掘調査も中止されることとなつた。ただし、これまでに行った発掘調査にかかる出土品整理及び発掘調査報告書の刊行が必要と判断されたため、市教委が県港湾課に申し入れ、2001年度において出土品整理業務を施行することとなつたものである。

5 発掘調査以後

調査中の1994年林謙作氏が代表者となった文部省科学研究費研究「縄紋晚期前葉—中葉の広域編年」において、北陸を小島俊彰・西野秀和・酒井重洋氏が分担報告した。ここでは晚期前葉は「勝木原・御経塚式」に括され、勝木原・御経塚1~3式に細分されている。ここにおいて「岩瀬天神式」なる土器型式の名称は消滅し、勝木原・御経塚1式の一部文様として捉えられることとなつた。



第7図 試掘確認調査 テレンチP1 実測図(1:20)



第8図 基本層序(試掘1 テレンチ)

第1次及び第2次発掘調査が完了した後、調査で出土した縄文土器について富山大学人文学部宮田明氏（当時）が整理し、1995年「富山市岩瀬天神遺跡出土の縄文土器について」と題し『富山市考古資料館紀要』第14号に発表した。この中で宮田氏は従来の「岩瀬天神型」の内容を検討して定義の検証および編年の位置付けについて明らかにし、北陸東部地域においては岩瀬天神型として認めるべき属性が存在するという立場を示した。（古川）

注

- (1) 他に1点岩瀬出土の中屋式土器破片があるが、これは早川が1941年「古代文化」及び1943年富山県史跡名勝天然記念物調査報告で報告した現「岩瀬天神II遺跡」の出土と推測される。早川の報告内容は弥生式土器に関する記載のみで、縄文土器が出土したということは書かれていない。しかしながら岩瀬と記し、岩瀬天神遺跡と別に取り扱っていること、またその後に刊行された『富山県の石器と土器』の中でも同様に富山岩瀬とのみ記し、岩瀬天神II遺跡出土の弥生土器と同じ表記をしていることから、岩瀬天神II遺跡の出土であることも考えられる。
- (2) 10点のうち1点は県史考古編において氷見市朝日貝塚出土とされていたものである。その土器の裏面には「岩セ」と注記があり、岩瀬天神遺跡出土であることを後日確認した。
- (3) 宮田氏も指摘しているが、「岩瀬天神式」の標式とされた資料について「勝木原・御経塚式」編年の再構築の過程で、岩瀬天神式以前の土器群を「岩瀬天神式」と呼び代えるといった意味に捉えられるような表現がなされているが、内容が曖昧であり、本稿では「新たな岩瀬天神式」が提起されたとは解釈しない立場をとるものである。

III 調査の成果

1 地形及び層序

調査対象区は試掘確認調査を行ったうち、南側部分の富山大学敷地である。今回調査区はそのうちの北部に位置し、現地形における標高は4.1~4.5mを測る。敷地内においては海岸側である北側から南側に向かいごく緩やかに傾斜している。過去において建物建築の際に整地が行われたため、自然堆積状態ではない。今回調査区は富山大学敷地のうちの北端部に位置している。

基本層序は、調査区内においては擾乱が著しいため、試掘確認調査の際比較的残りの良い1トレンチにおいて確認したものを標準とする。地表から下へ、第1層：表土（擾乱土、厚さ30cm）、第2層：黒色砂質土（厚さ5cm）、第3層：暗灰色細砂（厚さ30cm）、第4層：暗黄灰色中粒砂（地山、厚さ25cm）、第5層：暗黄色中粒砂（厚さ30cm）、第6層：明黄灰色中粒砂となる。

第2層黒色砂質土は、漆氏が植樹部分に確認した土器を含む「腐植土」であるかどうか、あるいは原位置を保って存在する遺物包含層であるかの判断はつかなかった。なおこの上からの出土遺物は確認されていない。

試掘確認調査では、第4層上面において土坑群を確認しており、ここが最初に確認した遺構検出面である。しかし発掘調査の結果、第3層中には最大3枚の遺構検出面があり、これらを上層遺構として括した。第4層上面で検出した遺構は下層遺構とした。

今回発掘調査地点においては、第1層の下は第3層となる。

2 調査方法

調査は、試掘確認調査で遺構を検出した部分全体を覆う任意グリッドを設定して行った。任意グリッドの基点(X0Y0)はその北西端に置き、東西方向をX軸、南北方向をY軸とした。今回調査区の北西隅はほぼX40Y30となる。

調査はまず富山大学敷地北西部から開始し、順次東へ掘り進んだ(第9図)。

まずバックホウで表土を除去し、その後人力で第3層を掘り下げた。

試掘確認調査では遺構検出面は1面と判断していたが、第1次調査において最初に検出した遺構面の10~15cm下にさらに遺構が存在することが確認されたため、第2次調査以降は第3層中における遺構検出面の層位的な検討を行いながら進めた。

3 遺構

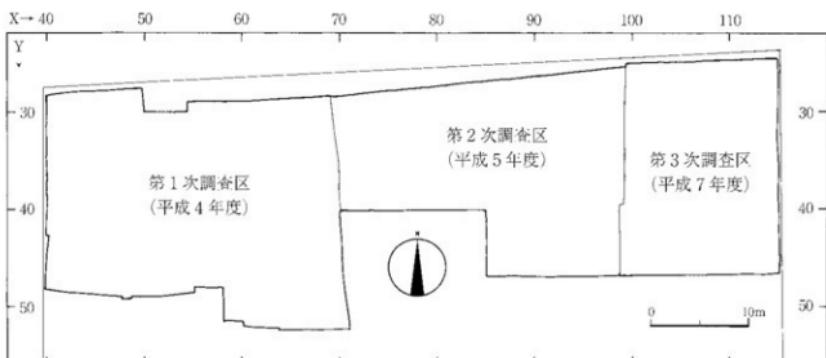
(1) 全体概要(第10図)

調査区全体にわたって搅乱が著しく、1940年に建築された社宅に関わると推定されるコンクリート構造物、敷き砂利、小規模な建物の礎石と推定される手の平大の石組列、また薬学部宿舎時代のごみ穴からは注射器や薬瓶などの医療関係の廃棄物が出土した。全体にわたり第2層は消失する。遺構はこれらの搅乱を受けていない部分から検出された。

遺構は、全体で444基の土坑を検出した。第3層中に1~3枚の遺構検出面を確認した。これらは調査時点では上層遺構1~3期として把握したが、砂地における凹凸面の形成という特殊な成因によって生じたレベル差の反映であると理解されたため、上層遺構・中層遺構に区分した。このような検討の結果、上層遺構として把握したものは小形の円形土坑348基である。これらは調査区のほぼ全体に分布し、第1次調査区の西半がやや疎である。

第4層上面で検出した遺構は下層遺構と呼び、上層遺構よりも一回り大きな円形土坑88基を中心、計96基の土坑を確認した。下層遺構は、第1次調査区の西側、第2次調査区全体、第3次調査区西側に分布し、上層遺構の分布とほぼ重複している。

なお第3次調査区において下層遺構9基が所在するが、確認面での検出にとどめた。

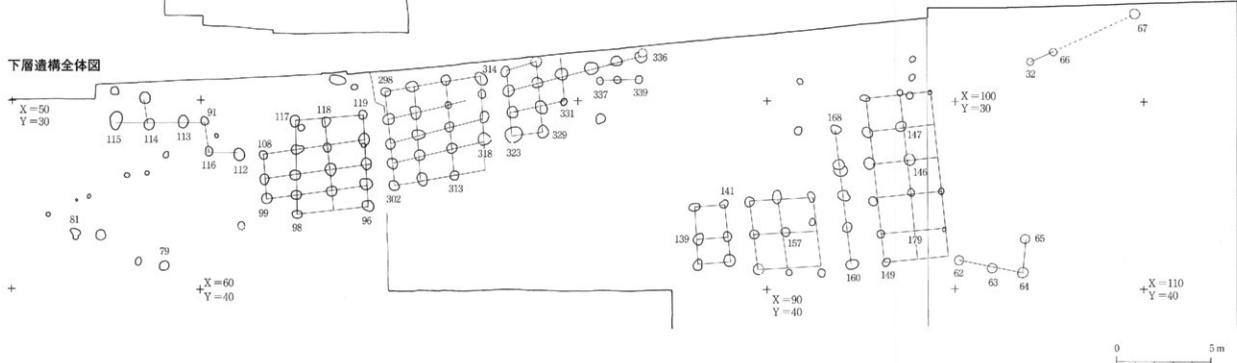


第9図 発掘調査地区分図(1:500)

上層遺構全体図



下層遺構全体図



第10図 遺構全体図(1:200)

(2) 第1次地区

平成4年度に実施した調査区で、X39~69, Y28~52の範囲の調査を行った。

①土層（第12図）

表土にはコンクリート片などを含み、全体的に擾乱が著しい。調査区の中央から南西部にかけて、掌大の河原石を数個組合せた礎石列や帶状の敷砂利、コンクリート構造物があり、これらは1940年に建築された社宅以降のものである。

上層遺構はこれらによる擾乱を受けない部分において、表土直下から検出されており、試掘確認調査時の第2層は存在しない。

第3層は3つに細分され、遺構は暗灰褐色砂からなる3a層の上面から切込んで構築している。第4層の上面は下層遺構の検出面である。

②遺構（第11, 13, 14図）

確認した遺構は、上層において土坑69基、下層において土坑42基の計111基である。

上層遺構

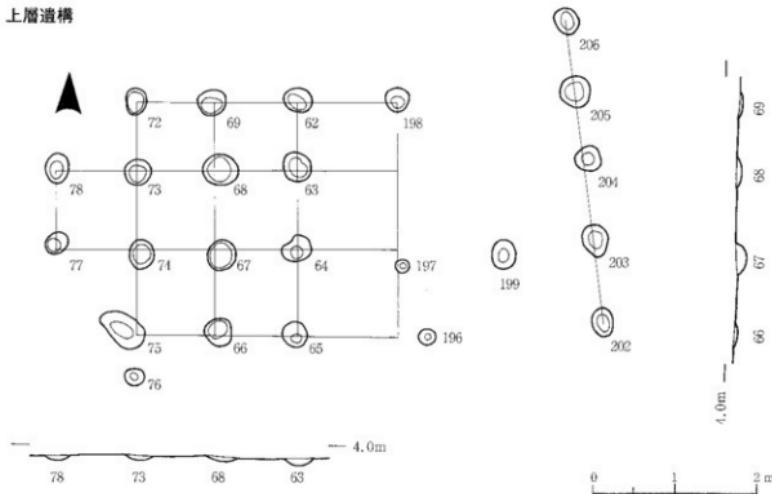
上層の土坑は、調査区全体に分布するが、北西部で密である。各土坑は、径20~40cmの円形プランで、浅い皿状の断面形を示す。土坑の覆土は、暗褐色（標準土色帖による／7.5YR3/3）の腐植質土で、乾燥により硬化する。ほとんどが単層であるが、この段階の地山である第3層の砂と混合している土が遺構下部に存在する土坑もいくつか認められる。約半数の土坑内から、縄文土器、各種石器、弥生土器、中世～近代の陶磁器類等が出土した。

上層の土坑の配列をみると、等間隔に並ぶ部分がある。X51~53Y35~37区には1間×2間の配列をなし、土坑間の間隔は1.0~1.1mを測る（P49~55）。X54~56Y35~37区にはL字形の配列があり、土坑間の間隔は1.0mを測る（P43~48）。X65~71Y31~34区には総柱建物状配列の土坑群が存在する。全体は3間×3間で、南北方位はN-3°-Wを示す。西列中央は1間分が張り出す。東側列の配列はあまり明瞭ではない。土坑間の間隔は、北側で0.85m、東側で1.25m、その他は1.0mである（P62~78, 197, 198）。東側列については第2次調査時の検出のため図上復元を行っており、測量誤差等を考慮したほうがよいであろう。なおこの土坑群の東側において、第2次調査の際直線状配列をなす土坑群（P202~206）を検出した。

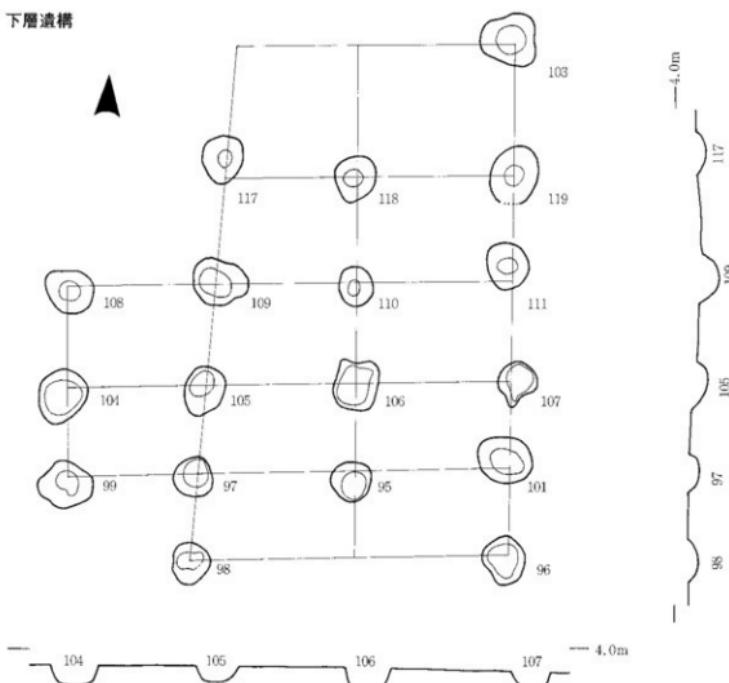
下層遺構 下層の土坑は、調査区の東半、X51列より東に分布し、特に2ヶ所にまとまっている。X55~61Y29~32区には7基が1.1~1.9m間隔でランク状に配置する。南北方位はN-5°-Wを示す（P86~116）。またX63~68Y31~36区には総柱建物状配列の土坑群が存在する。全体は5間×2間で、西列中央は1間分が張り出す。全体の南北方位はN-6°-Wであるが、西側列のみN-1°-Wとなっており、全体形状は台形を示す。土坑間の間隔は、南北方向で1.0~1.6m、東西方向で1.6~1.9mである（P95~119）。

下層の土坑は、径30~80cmの円形プランで、やや深い椀状の断面形を示すものが多い。これらのうち径50cmを超える大形のものは24基があり、そのほとんどが総柱建物状配列の土坑群に含まれる。土坑の覆土は黒色（7.5YR1.7/1）の腐植質土で、灰色の砂が混じるものもあるがほとんどが単層である。ほぼすべての土坑内から、縄文土器、各種石器、弥生土器、被熱疊破片、中世～近代の陶磁器類、近代のガイシ等が出土し、特に縄文土器・被熱疊破片の多いことが留意された。また十馬の尾部と推定される土師質の土製品の出土があった。これらの遺物は土坑の底面から上面までまんべんなく出土し、特段の傾向を示

上層遺構

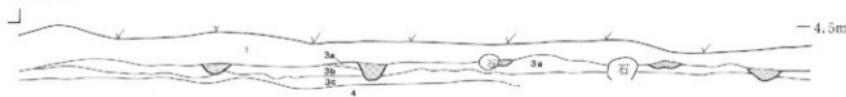


下層遺構



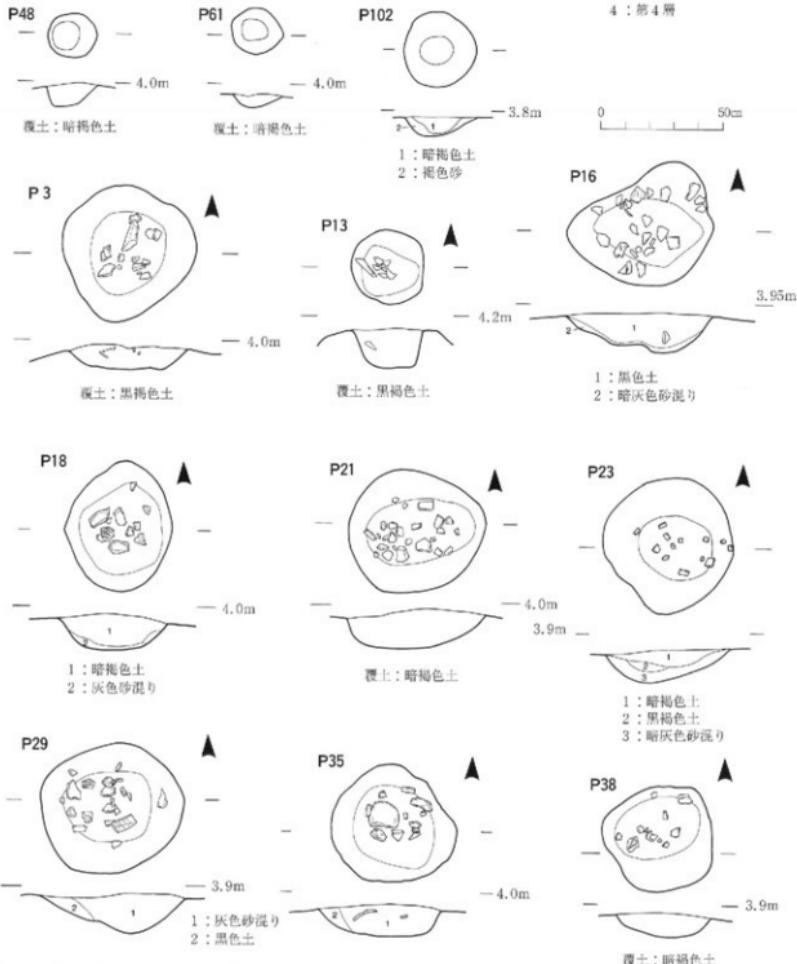
第11図 第1次地区検出遺構(1:60)

X40Y30



第12図 第1次地区土層(北壁) (1 : 40)

- 1 : 第1層表土
- 3a : 暗灰褐色砂
- 3b : 灰色褐色砂
- 3c : 褐色砂
- 4 : 第4層



第13図 第1次地区遺構 (1 : 20)

す状況はないが、上層の土坑に比べて1つの土坑から出土する遺物量は多いと言える。土坑内の土を水洗選別し微細遺物を抽出したところ、石器製作時の剥片やチップ、木炭片・骨片・玉末製品などを検出することができた。

(3) 第2次地区

平成5年度に実施した調査区で、X69~99、Y25~46の範囲の調査を行った。

① 土層（第15図）

第1層は4枚に区分され、いずれも攪乱である。

第3層はa、bの2つに細分され、構造はそれぞれの上面から切込んで構築している。3a層は灰黄色砂で、第1次地区の3b層に相当し、3b層は暗灰黄色砂で、第1次地区の3c層に相当するものと思われる。第2次地区3b層上面検出構造を中層構造とする。第4層は地山で、その上面は下層構造の検出面である。地山第5層は3層に細分される。

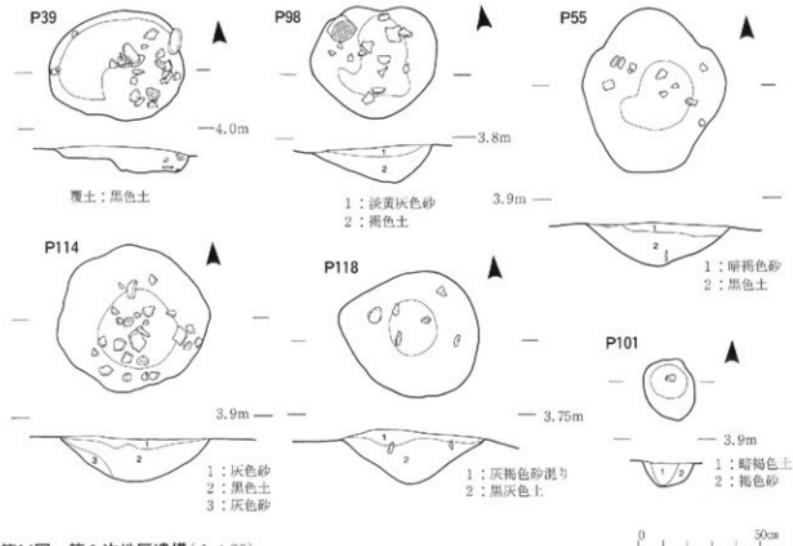
② 遺構（第16~19図）

確認した構造は、上層において土坑230基、下層において45基の計275基である。

上層構造

上層の土坑は、調査区全体に分布するが、北側部分で濃密である。各土坑は、第1次地区と同様、径20~40cmの円形プランで、浅い皿状の断面形を示す。土坑の覆土は暗褐色（7.5YR 3/3）の腐植質土で、検出状態も第1次地区と同一である。約半数の土坑内から、縄文土器、各種石器、剥片、弥生土器、古墳時代の土師器、時代不明の鉄釘等が出土した。おのおのの土坑から出土した遺物量は少ない。

上層の土坑の配列をみると、一直線に並ぶ土坑列、総柱建物状配列の土坑群が多数存在する（第10図）。X71~72 Y30~33区では5基の土坑（P202~206）が南北方向に、X74 Y



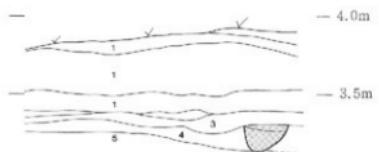
第14図 第1次地区遺構(1:20)

第15図中のアミ目(スクリーン)
は土坑覆土を示す



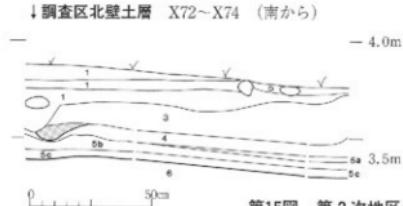
第2次調査区東壁土層 X99Y30付近 (西から)

- 1 : 第1層表土
- 3a : 黒色土
- 3b : 褐色土
- 4 : 第4層(黄灰色中粒砂)



↑調査区北壁土層 X75-X77 (南から)

- 1 : 第1層表土
- 3 : 第3層(暗灰色細砂)
- 4 : 第4層(黄灰色中粒砂)
- 5 : 第5層(暗黄色中粒砂)

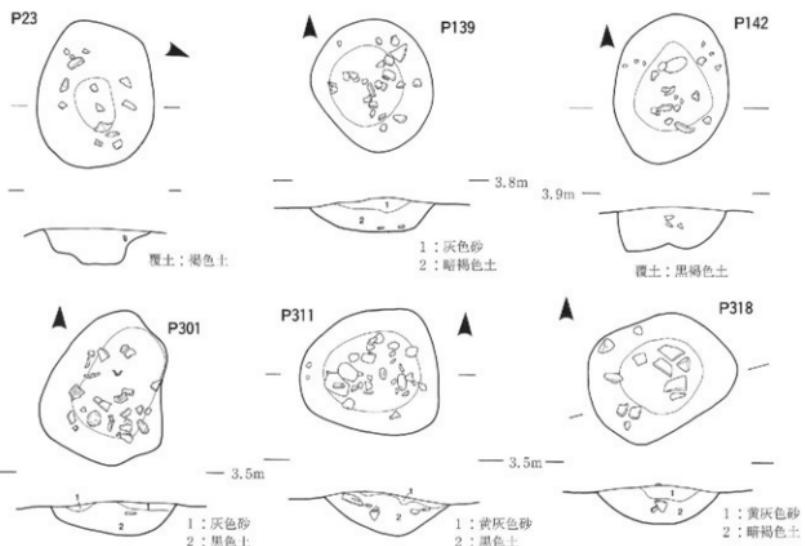


↓調査区北壁土層 X72-X74 (南から)

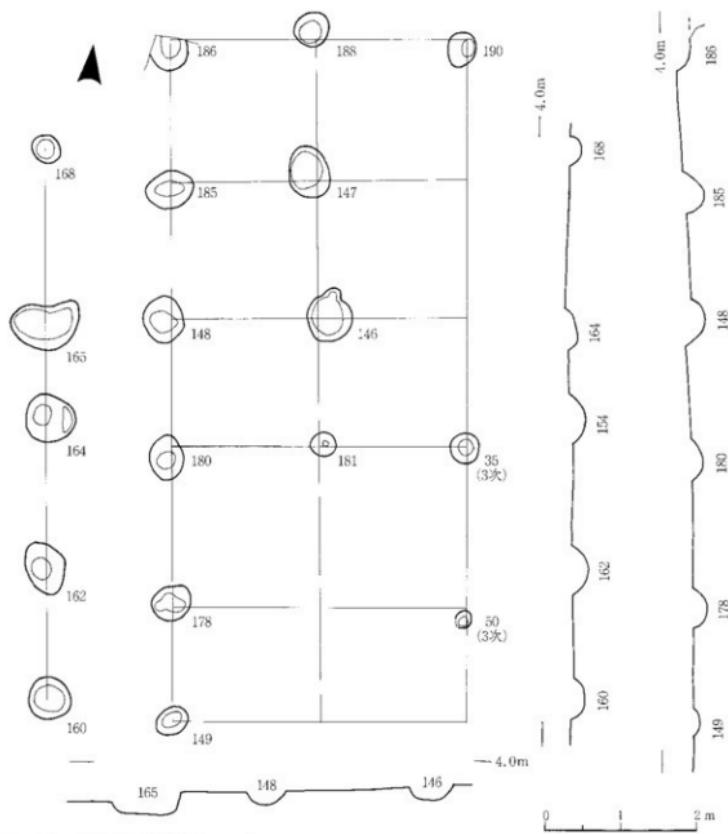
- 1 : 第1層表土
- 3 : 第3層
- 4 : 第4層
- 5a : にぶい淡黄灰色砂
- 5b : にぶい黄灰色砂
- 5c : 暗褐色砂
- 6 : 第6層(明黄灰色中粒砂)

第15図 第2次地区土層(1:40)

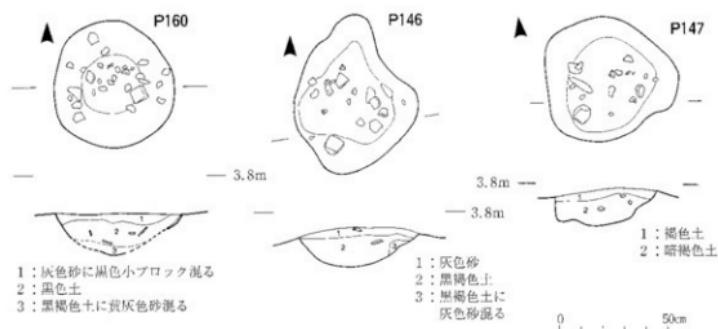
(道標) 0 50cm



第16図 第2次地区遺構(1:20)



第17図 第2次地区下層構造(1:60)



第18図 第2次地区構造(1:20)

36~39区では3基の土坑（P8,108~109）が南北方向に、X81~85Y36~37区では3基の土坑（P123~136）が東西方向一直線に並ぶ。

また、総柱建物状配列の土坑群は、X72~81Y29~34区に最大8間四方の配列をなすがやや不規則であり、正確な配列関係を十分把握できない。土坑間の間隔は1.0m前後である（P209~262）。X79~81Y33~35区には2間四方の配列があり、土坑間の間隔は、0.8~1.0m前後である（P117~121）。

またX81~83Y29~33区には1間×4間の配列（P240~288）、X84~88Y26~32区には4間×6間以上の配列をなす土坑群（P252~293）が存在する。後者における土坑間の間隔は、0.8~1.2mを測る。

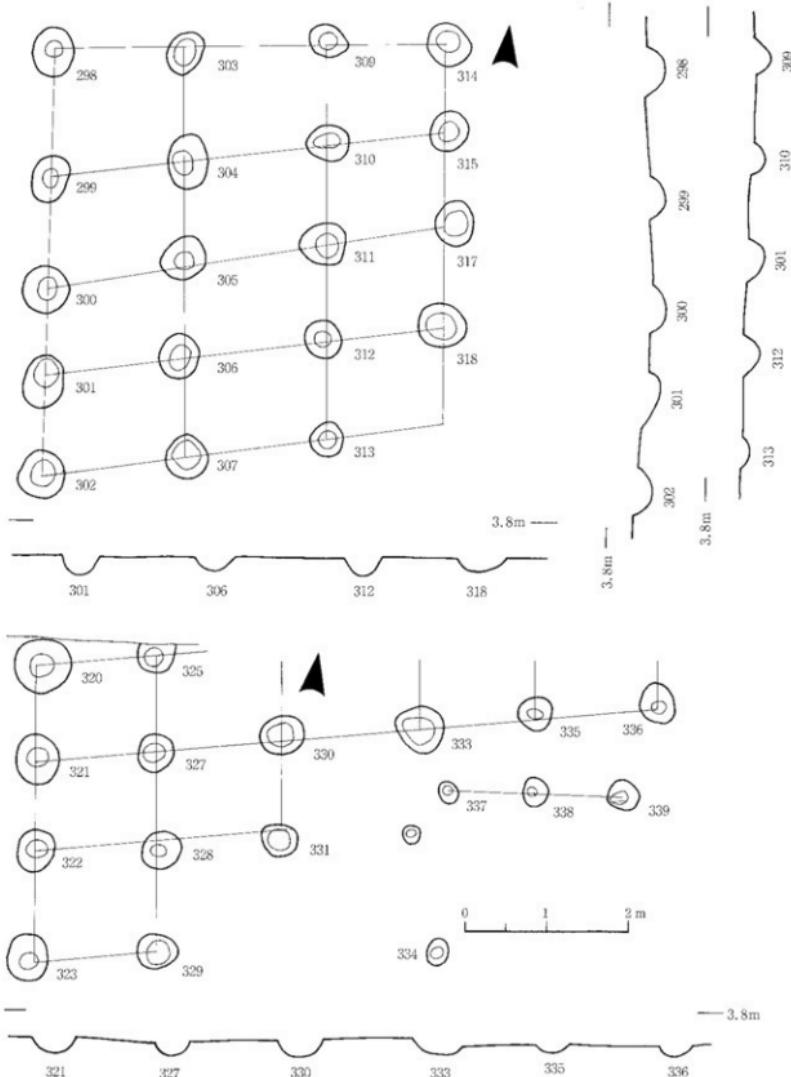
中層遺構 調査区の南東部においては、総柱建物状配列の土坑群3ヶ所と一直線に並ぶ土坑列1ヶ所が東西に並び、いずれも南北方位はN-8°-Wを示している。東西軸と南北軸は直交する。X85~88Y35~38区には南北方向に1間×2間の総柱建物状配列の土坑群（P139~247）が存在する。X88~92Y34~39区には南北方向に2間×2間の総柱建物状配列の土坑群（P142~249）が存在する。またその東隣にあたるX93~94Y31~38区には一直線に並ぶ土坑列があり、5基の土坑（P160~168）が不定間隔で並ぶ。さらにその東隣のX95~99Y29~38区には南北方向の2間×5間の総柱建物状配列の土坑群（P148~190, 3次35, 50）が存在する。土坑間の間隔は、南北方向で1.7~2.1m、東西方向で1.9~2.0mで、やや広い。

これらを構成する土坑は、径30~70cmを測り、下層遺構とほぼ同じかやや小形の大きさを示し、遺物量も多い点で下層遺構と共通するが、遺構覆土は暗褐色~黒褐色土で、色調が異なる。

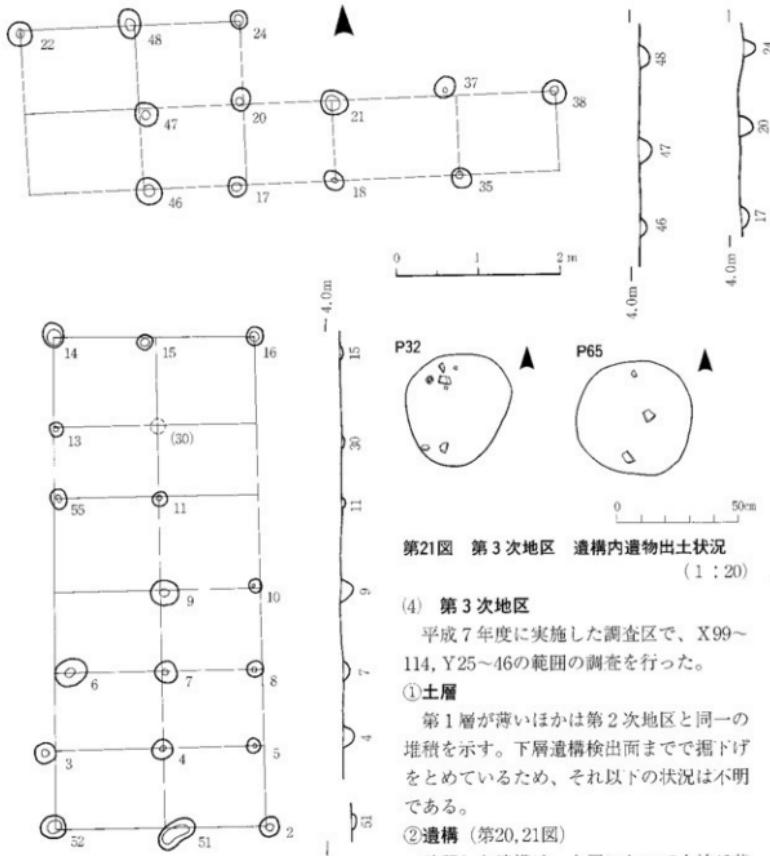
下層遺構 下層の土坑は、調査区の北西部において、第1次調査区側から引続いて存在するものが認められた。X69~75Y28~34区には総柱建物状配列の土坑群（P298~318）が存在する。全体は4間×3間で、北側へ伸びる可能性がある。全体の南北方位はN-7°-Wを示し、西側に約1m離れて所在する第1次調査時の下層土坑群と1°のずれがある。土坑間の間隔は、南北方向で1.0~1.5m、東西方向で1.4~1.8mである。東西軸と南北軸は直交せず、東列が北寄りとなる平行四辺形状を呈する。またその東に接するX76~83Y27~32区には5間×3間のT字形配列を主軸にした土坑の配列（P320~336）が見られる。全体の南北方位はN-7°-Wで、西側に接する土坑群と同一軸を示す。土坑間の間隔は、南北方向で1.2~1.3m、東西方向で1.4~1.7mで、それぞれの軸は直交しない。これらの土坑は径45cm以上の円形プランで、やや深い椀状の断面形を示す。土坑の覆土は黒色（7.5 YR1,7/1）の腐殖質土で、灰色の砂が混じるものもあるがほとんどが单層である。ほぼすべての土坑内から、縄文土器、各種石器、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器、時代不明の鉄釘、近世陶磁器等が出土した。第1次地区同様縄文土器・被熱礫片が多い。土坑内の微細遺物には石器製作時の濁片やチップ、木炭片・骨片などがある。

またX81~83Y28区では3基の土坑が東西方向一直線に並ぶ。土坑間の間隔は1.0~1.1mで、土坑径は約30cm前後とやや小ぶりである（P337~339）。

特に注目する土坑としては、古墳時代とみられる滑石製臼玉の出土があったP307である。この土坑からは、鉄の細かい塊やベンガラ塊が縄文土器・弥生土器など、祭祀的性格の強い遺物が出土している。



第19図 第2次地区下層構造(1:60)



第20図 第3次地区上層遺構(1:60)

第21図 第3次地区 遺構内遺物出土状況
(1:20)

(4) 第3次地区

平成7年度に実施した調査区で、X99～114, Y25～46の範囲の調査を行った。

①土層

第1層が薄いほかは第2次地区と同一の堆積を示す。下層遺構検出面まで掘下げをとめているため、それ以下の状況は不明である。

②遺構(第20, 21図)

確認した遺構は、上層において土坑49基、下層において9基の計58基である。

上層遺構 上層土坑は調査区西半に多くが

偏って所在する。このうち縦柱建物状配列をなすものは、X100～106Y32～36区に東西方向に2間×5間の土坑群(P17～48)、X100～102Y38～44区に南北方向の2間×6間の土坑群(P2～52)がある。それぞれの土坑群は一部欠落しているが、東西軸と南北軸は直交する。各土坑は径20～40cmの円形プランで、浅い皿状の断面形を示す。土坑の覆土は暗褐色(7.5YR3/3)の腐植質土で、検出状態も第1次地区と同一である。

下層遺構 下層の土坑は、第2次地区東端に所在する縦柱建物状土坑群の東端列のうち未検出であったものを確認したほか、X100～103Y37～39区においてL字形の配列を確認した。土坑間の間隔は1.7～1.8mである(P62～65)。またX103～109Y25～28区において

[92年度]

年次	令	令	出発地		到着地		経由地
			港	港	港	港	
92	33	34	E1	27-19-A	E1	-	-
	8.2	8.3	E2	69-20-5	横十郎、横十郎	-	P16
	8.3	56-55-10	E3	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P16
	8.4	69-28-11	E4	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P16
	8.5	69-26-14	E5	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P16
	8.6	69-26-14	E6	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P16
	8.7	20-18-7	E7	-	-	-	P17
	8.8	64-29	E8	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	8.9	60-6	E9	-	-	-	P17
	9.1	39-13-13	P1	-	-	-	P17
	9.2	20-36-16	P2	-	-	-	P17
	9.3	25-13	P3	-	-	-	P17
	9.4	65-17	P4	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.5	56-45-75	P5	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.6	20-35-3	P6	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.7	61-23-6	P7	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.8	61-50-19	P8	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.9	20-20-3	P9	-	-	-	P17
	9.10	65-97-13	P10	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.11	69-13	P11	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.12	69-13	P12	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.13	72-19-3	P13	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.14	72-19-3	P14	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.15	20-19-3	P15	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.16	72-19-3	P16	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.17	15-17	P17	-	-	-	P17
	9.18	61-13	P18	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.19	60-59-16	P19	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.20	17-21-1	P20	-	-	-	P17
	9.21	69-5	P21	-	-	-	P17
	9.22	62-12-5	P22	-	-	-	P17
	9.23	62-12-5	P23	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.24	61-42-13	P24	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.25	62-12-5	P25	-	-	-	P17
	9.26	6-7	P26	-	-	-	P17
	9.27	61-13	P27	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.28	63-13	P28	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.29	61-23-6	P29	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.30	62-12-5	P30	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.31	63-17	P31	-	-	-	P17
	9.32	62-20	P32	横十郎、横十郎	横十郎、横十郎	-	P17
	9.33	62-20-5	P33	-	-	-	P17
	9.34	70-19-5	P34	-	-	-	P17
	9.35	70-17-9	P35	-	-	-	P17
	9.36	61-25-10	P36	-	-	-	P17
	9.37	28-36-4	P37	-	-	-	P17
	9.38	60-61-12	P38	-	-	-	P17
	9.39	69-32-8	P39	-	-	-	P17
	9.40	40-31-2	P40	-	-	-	P17
	9.41	31-8	P41	-	-	-	P17
	9.42	32-5	P42	-	-	-	P17
	9.43	37-26-6	P43	-	-	-	P17
	9.44	20-19-5	P44	-	-	-	P17
	9.45	28-35-12	P45	-	-	-	P17
	9.46	32-30-5	P46	-	-	-	P17
	9.47	32-30-5	P47	-	-	-	P17

[93年度]

番号	地名	出土遺物	備考	番号	地名	出土遺物	備考
P1	32・29・7	なし		P105	41・33・10	縄文土器	
P2	45・32・4	なし		P106	41・33・10	縄文土器	
P3	35・32・5	縄文土器、陶土器		P107	56・44・4	縄文土器	
P4	35・32・3	なし		P108	36・44・4	縄文土器	
P5	45・39・12	なし		P109	47・44・7	縄文土器、石器、削片（玉器）、チップ（鉄石先、玉鏡）	
P6	38・3・15	なし		P110	32・2・8	陶文土器、陶土器、スグ、チップ（セイシ、玉鏡）、骨片	
P7	39・37・17	縄文土器、陶土器、熱熱繩片		P111	44・41・11	なし	
P8	30・47・4	縄文土器		P112	30・37・15	縄文土器、安達子竹、骨片、和田（安山岩）	
P10	45・36・11	縄文土器、陶土器		P113	23・21・3	なし	
P11	30・38・15	なし		P114	26・22・5	陶文土器	
P12	25・24・11	なし		P115	33・25・20	陶文土器	
P13	34・25・7	なし		P116	45・39・10	縄文土器	
P14	35・32・9	陶文土器		P117	25・20・22	縄文土器	
P15	44・33・9	なし		P118	1・36・14	陶文土器	
P19	20・18・6	なし		P119	27・25・20	陶文土器、削片	
P20	42・34・13	縄文土器		P120	30・24・15	陶文土器	
P22	60・48・15	縄文土器、陶土器、陶片（玉器）、瓦片		P121	30・28・6	なし	
P24	38・37・15	縄文土器、陶片（玉器）		P122	32・40・10	なし	
P25	54・18・11	縄文土器、陶片、削片（玉鏡）、陶土器、骨片、瓦片		P123	38・36・19	縄文土器、陶土器	
P27	26・29・9	削片（安田）		P124	22・16・8	なし	
P28	26・26・3	縄文土器、陶土器、削片（方錐形）、骨片、熱熱繩片		P125	47・39・8	なし	
P29	25・25・10	陶文土器		P126	65・29・1	縄文土器、陶生土器、削片（黑萬石、鐵れん）	黒萬石に色付
P30	21・20・4	なし		P127	25・33・14	なし	
P31	20・20・11	なし		P128	63・53・21	縄文土器、陶生土器、瓦片	
P32	21・18・6	なし		P129	52・47・33	縄文土器、陶土器、占領士跡跡	
P33	15・30・6	なし		P131	52・45・10	縄文土器、陶土器	
P36	15・11・9	なし		P132	38・36・19	縄文土器、陶生土器	
P37	23・23・16	なし		P133	27・29・19	縄文土器	
P38	27・20・11	なし		P134	23・23・18	縄文土器、削片（花崗岩）	
P39	25・17・18	なし		P135	27・27・18	縄文土器、陶生土器、削片（黒萬石、鐵れん）	
P40	32・21・17	なし		P136	61・57・21	縄文土器、陶生土器、瓦片	
P41	21・20・15	なし		P137	64・54・14	陶文土器、陶片	
P42	20・21・6	縄文土器		P138	30・25・8	なし	
P43	20・20・13	なし		P139	25・22・9	なし	
P44	22・7・14	なし		P140	58・43・3	縄文土器、打撲痕泥、黒萬石、白模二件器、削片（玉器）、鐵れん跡跡	
P45	26・25・11	縄文土器		P141	72・51・25	縄文土器、陶片（石器）、削片（玉器）、瓦片	
P46	34・20・7	なし		P142	59・57・21	縄文土器、陶生土器、瓦片	
P47	35・26・21	陶文土器		P143	64・53・21	縄文土器、陶片	
P48	35・25・16	陶文土器		P144	44・34・14	なし	
P49	26・22・15	縄文土器		P145	30・25・8	なし	
P50	20・21・6	縄文土器		P146	61・47・17	陶文土器	
P51	20・20・13	なし		P147	37・29・19	縄文土器	
P52	22・17・4	なし		P148	23・23・18	縄文土器	
P53	26・25・11	陶文土器		P149	27・27・18	縄文土器、打撲痕泥、黒萬石、白模二件器、削片（玉器）、鐵れん跡跡	
P54	21・19・6	陶文土器、陶生土器		P150	62・51・25	縄文土器、陶片（石器）、削片（玉器）、瓦片	
P55	19・18・1	なし		P151	60・57・21	縄文土器、陶生土器、瓦片	
P56	22・17・5	なし		P152	60・57・21	縄文土器、陶生土器、瓦片	
P57	26・30・8	陶文土器		P153	57・55・9	陶文土器、陶片（石器）、削片（玉器）、瓦片	
P58	26・25・12	なし		P154	90・47・6	縄文土器	
P59	27・22・10	なし		P155	59・57・19	縄文土器	
P60	33・(27)・17	なし		P156	44・37・19	縄文土器、陶生土器	
P61	38・25・11	なし		P157	65・51・12	縄文土器、陶生土器、詳熱繩片	
P62	40・24・13	なし		P158	27・25・11	陶文土器	
P63	30・21・20	なし		P159	31・28・13	縄文土器	
P64	25・17・3	なし		P160	50・48・18	縄文土器、陶生土器、鐵頭刀柄	
P65	55・30・6	陶文土器、陶片（ミヤキ屋）		P161	57・47・16	縄文土器、陶生土器	
P66	13・13・3	陶生土器		P162	36・36・19	縄文土器	
P67	33・30・19	縄文土器		P163	32・20・11	なし	
P68	36・3・22	なし		P164	65・55・9	陶文土器、陶片（乳石斑）	
P69	20・19・3	なし		P165	160・41・7	縄文土器、陶片（乳石斑）、削片（玉器）、瓦片	
P70	30・135・13	なし		P166	96・27・36	5・25・15	
P71	22・19・11	なし		P167	44・44・14	なし	
P72	33・21・10	なし		P168	20・20・13	陶文土器	
P73	29・22・25	なし		P169	40・36・11	縄文土器、削片（玉器）	
P74	40・30・2	縄文土器		P170	33・27・6	縄文土器	
P75	22・19・5	なし		P171	47・35・4	縄文土器	
P76	26・24・17	縄文土器		P172	55・55・15	縄文土器、陶生土器、西河谷有熱繩片	
P77	24・22・8	陶文土器、陶生土器		P173	22・20・6	縄文土器	
P78	26・24・11	縄文土器		P174	8・15・3	なし	
P79	26・(9)・10	なし		P175	30・28・11	なし	
P80	26・26・16	陶文土器		P176	30・31・11	なし	
P81	22・21・12	なし		P177	36・26・17	なし	
P82	21・18・4	縄文土器、陶生土器		P178	1・35・11	縄文土器、陶生土器	
P83	17・13・1	なし		P179	33・33・10	縄文土器	
P84	5・25・15	なし		P180	38・37・8	なし	
P85	25・21・11	縄文土器		P181	33・27・7	縄文土器	
P86	15・11・6	なし		P182	47・47・17	縄文土器	
P87	98・26・15	なし		P183	21・29・7	なし	
P88	34・27・12	なし		P184	26・23・11	なし	
P89	27・22・14	陶文土器、陶生土器		P185	30・21・9	なし	
P90	20・16・6	縄文土器		P186	21・27・14	なし	
P91	39・33・23	陶文土器、陶生土器		P187	38・33・10	なし	
P92	38・38・10	陶文土器、陶生土器		P188	38・33・10	なし	
P93	28・38・5	なし		P189	38・33・10	なし	
P94	28・30・9	なし		P190	38・33・10	なし	
P95	24・21・4	なし		P191	31・28・13	なし	
P96	48・39・6	陶文土器、削片（玉器）、チップ（玉器）		P192	43・31・9	なし	
P100	26・23・2	なし		P193	36・32・8	縄文土器	
P101	41・37・18	陶文土器		P194	39・36・13	なし	
P103	38・31・19	なし		P195	39・36・13	なし	
P104	41・39・16	陶文土器、萬葉丸（赤津色）		P196	39・36・13	なし	

番号	地名 其・他	出土遺物	備考	番号	地名 其・他	出土遺物	備考
P229	25 - 17 - 14	なし		P500	63 - 54 - 5	陶文土器、チップ(瓦片)、骨灰、火薬片、鐵熱碎片	下層
P230	27 - 23 - 4	陶文土器		P501	60 - 60 - 14	陶文土器、瓦片、鐵熱碎片、骨灰、火薬片、鐵、骨灰、瓦片、鐵、骨灰(瓦片)、鐵熱碎片	上層
P231	35 - 27 - 16	陶文土器、陶生土器		P502	64 - 42 - 20	陶文土器、瓦片(三脚)、骨灰、瓦	二層
P232	50 - 30 - 13	陶文土器、陶生土器		P503	56 - 46 - 20	上種瓦器、瓦片、瓦片(三脚)、骨灰、火薬片、鐵	二層
P233	35 - 28 - 13	陶文土器		P504	42 - 42 - 16	陶文土器、瓦片、瓦	二層
P234	23 - 21 - 12	なし		P505	400 - 45 - 12	陶文土器、陶生土器、鐵熱碎片	下層
P235	26 - 26 - 20	なし		P507	54 - 37 - 10	陶文土器、瓦片七枚	下層
P236	24 - 24 - 16	陶生土器		P508	59 - 62 - 16	陶文土器、帶形瓦片、瓦片、鐵熱碎片	下層
P237	29 - 19 - 14	陶生土器		P509	50 - 44 - 14	陶文土器、瓦片、瓦片(三脚)、骨灰、火薬片	下層
P238	陶文土器			P510	52 - 50 - 18	陶文土器、瓦片、瓦片(三脚)、骨灰、火薬片、鐵	下層
P239	29 - 34 - 13	なし		P511	45 - 40 - 20	陶文土器、瓦片(三脚)、骨灰、瓦片、鐵熱碎片	下層
P240	30 - 27 - 13	なし		P513	66 - 50 - 19	陶文土器、瓦片一軒	二層
P242	30 - 24 - 15	なし		P514	27 - 25 - 8	陶文土器、瓦片(石器)、木灰	二層
P243	60 - 50 - 12	陶生土器、陶生土器		P515	49 - 40 - 12	陶文土器、水瓶	二層
P246	51 - 51 - 24	なし		P516	33 - 42 - 25	陶文土器、瓦片一軒、鐵熱碎片、瓦片	二層
P247	38 - 32 - 20	陶生土器		P517	25 - 29 - 10	陶文土器、瓦片(三脚)、骨灰、木灰	二層
P248	57 - (20) - 16	陶生土器		P518	36 - 30 - 13	陶文土器、瓦片(瓦片)、骨灰、鐵熱碎片、木灰	下層
P249	37 - 31 - 13	なし		P519	35 - 25 - 13	陶文土器	二層
P250	38 - 27 - 10	なし		P520	30 - 25 - 7	陶文土器、瓦片	二層
P252	37 - 33 - 17	陶生土器					
P253	32 - 26 - 6	なし					
P254	34 - 33 - 15	なし					
P255	40 - 34 - 16	なし					
P256	38 - 32 - 18	陶文土器、瓦					
P257	26 - 21 - 10	なし					
P258	06 - 21 - 12	陶生土器					
P259	37 - 34 - 14	陶生土器					
P260	29 - 26 - 6	なし					
P263	37 - 30 - 10	なし					
P265	29 - 20 - 8	なし					
P266	45 - 36 - 12	陶生土器					
P267	35 - 25 - 9	陶生土器					
P268	40 - 37 - 12	陶生土器					
P269	33 - 28 - 17	なし					
P270	34 - 32 - 18	なし					
P271	33 - 27 - 13	なし					
P272	30 - 35 - 7	なし					
P273	25 - 23 - 3	なし					
P274	43 - 41 - 7	なし					
P275	37 - 30 - 3	陶生土器					
P276	23 - 23 - 12	なし					
P277	36 - 33 - 12	なし					
P278	30 - 30 - 11	なし					
P279	35 - 29 - 9	なし					
P280	45 - 34 - 4	陶生土器					
P281	45 - 45 - 10	陶生土器					
P282	24 - 18 - 10	なし					
P283	45 - 40 - 13	陶生土器					
P284	45 - 38 - 10	なし					
P286	41 - 32 - 16	陶生土器					
P287	41 - 40 - 13	陶生土器					
P288	23 - 18 - 2	なし					
P289	47 - 41 - 15	陶文土器、瓦片十枚					
P290	29 - 36 - 7	なし					
P291	23 - 22 - 8	なし					
P292	9 - 63 - 10	陶生土器					
P293	22 - 21 - 13	なし					
P294	40 - 38 - 10	なし					
P295	23 - 21 - 13	なし					
P296	38 - 34 - 17	なし					
P297	33 - 27 - 7	陶生土器					
P298	55 - 52 - 16	陶文土器、瓦片、鐵熱碎片、骨灰土器、瓦片	下層				
P299	62 - 40 - 13	陶文土器	下層				
P300	52 - 49 - 16	陶文土器、陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	中層				
P301	64 - 47 - 14	陶生土器	中層				
P302	58 - 39 - 20	陶文土器、陶生土器、チップ(瓦器)	下層				
P303	52 - 64 - 13	陶生土器、陶生土器、瓦片、骨灰	下層				
P304	60 - 46 - 6	陶生土器、陶生土器、瓦片、骨灰	下層				
P305	33 - 49 - 15	陶文土器、陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	中層				
P306	47 - 43 - 15	陶文土器、瓦片一軒、瓦片(瓦器)、鐵熱、骨灰	下層				
P307	30 - 50 - 17	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P309	45 - 45 - 15	陶生土器、帶形瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P310	54 - 54 - 18	陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P311	57 - 52 - 15	陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P312	44 - 44 - 13	陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P313	42 - 41 - 12	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P314	59 - 44 - 17	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P315	53 - 38 - 23	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P316	57 - 45 - 14	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P317	33 - 15 - 17	陶生土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)	下層				
P318	61 - 47 - 16	陶文土器、瓦片(瓦器)、瓦片(瓦器)、歩行多軌道、火薬	下層				
P319	31 - 50 - 14	陶文土器、瓦片(瓦器)	下層				

直線状に並ぶものを確認した（P22,32,50）。

（古川）

4 遺物

出土した遺物には、縄文時代から近世のものがある。

縄文時代の遺物には、縄文土器・土器片鉢・石錐・石錐・削器・磨製石斧・打製石斧・石棒・石皿・磨石・敲石・砥石・玉未成品・剥片がある。弥生時代から古墳時代初めの遺物には土器がある。古墳時代の遺物には、須恵器・土師器・白玉がある。奈良・平安時代の遺物には、土師器・須恵器・土馬がある。中世～近世の遺物には、土師器・青磁・珠洲焼・瓦質火鉢がある。時代不明の遺物には、骨・貝・種実・木炭がある。（古川）

（1）縄文時代の遺物

縄文土器（第22～29図、図版8～11）

第1・2次出土の土器の分類・記述については、宮田明氏の報文（宮田1995）を再録する。

①分類

発掘調査によって得られた遺物はすべて破片であり、このうち縄文土器は後期後葉から晩期中葉を主体とし、その前後の時期の土器も若干出土している。異なる遺構の破片が接合した例は第25図95の一例を確認し、同様に接合はしないものの同一個体と考えられる例が第24図71と72である。

土器の分類は、後期後半から晩期中葉のものについて行い、前後の時期のものはそれぞれ一括して扱うものとする。時期区分に関しては高岡市勝木原遺跡、井口村井口遺跡において提示されたものを参考にした。

第1群 井口第I期併行期以前の土器

第2群 井口第II～IV期併行期の土器

第3群 晩期I・井口第V期併行期の土器

第4群 晩期II・井口第VI期併行期の土器

第5群 晩期III・井口第VII期併行期の土器

第6群 晩期IV・井口第VIII期併行期以後の土器

第7群 並製（半精製）・粗製土器

② 第1次地区出土土器

第1群（第22図1～4）

1は蛇行する沈綫文のあるものであり、後期中葉に比定されるものと考えられる。2・4は羽状縦文を特徴的にもつ土器であり、3は滑川市本江遺跡の平縁深鉢C7型に対比され、ともに洒見式に比定されるものと考えられる。

第2群（第22図5～12）

5・6は頸部に列点ある隆帯がめぐり、壺形を呈するものと考えられる。7は縄文地に沈線で筋錘形の意匠を描いている。8～11は口縁部に数条の沈線がめぐるものである。いずれも様相は捉えかねるが、後期後末葉の土器であると考えられる。12は五条の縦短線を単位文様として背向する弧線を施し、円形刺突と穿孔が認められる椀器形の浅鉢形と考えられる土器であり、第2群の中では新相を示すものである。

第3群（第22図13～18）

13は小さな山形の波頂部であり、波状の口縁部にそって二条の沈線を施し、波頂部に三

又文を彫り込む。波頂端部は面を取り、内面方向にせりだす。14～18は磨消部を磨き潰して縄文部が浮き出る手法が特徴的に認められる縄文を多用する土器であるが、17に関しては縄文帯を内面から押出すような形で浮き出すものであり、手法は異なる。14は波頂端部を内面方向にひねり込むものであり、三叉文を欠くが、岩瀬天神型の特徴を示すものである。15は玉抱三叉文をもつと考えられるものであり、18は縄文帯に挟まれた無文部に、潰れているが、連結三叉文を施している。

第4群（第22・23図19～35）

19は磨消縄文を欠き、浅太い沈線による三叉文をもつものであり、外展する台形の波頂部に一対のボタン状の貼付を行なうものと考えられる。20～25は磨消縄文を施すものであり、20・24では沈線による三叉文、21・23・25は彫り込みによる三叉文を施し、25では入組帶縄文が認められる。26～28は三叉文と磨消縄文の両者を欠くものであり、沈線は浅太く、19と共通する特徴である。29～35は浅鉢形土器であり31には赤彩が認められる。29は口縁内面に縄文帯がめぐるものであり、高岡市勝木原遺跡に類似する例が認められ、第3群に属する可能性がある。34・35は口唇部に加飾帯がめぐる皿器形の浅鉢形土器であり、35は玉抱三叉文が認められ、やはり第3群に属する可能性がある。

第5群（第23図36～49）

36は、口縁部に半齒状文系統の浮彫文がめぐるものであり、いわゆる珠文と呼ばれるものに相当する文様である。器面の研磨は入念であり、文様は繁縝な印象を受ける。37～39は瘤状の突起が横に並ぶいわゆるB突起を口唇部にもつものであり、口縁部には縄文を施し、頸部に無文帯がめぐるものと考えられるが、39は条痕調査を行なっている。40・41はB突起を欠き、口唇部に刻みを施すものあり、36と共通する。40は刻みを交互に行なうことが特徴であり、41は口縁部に粗雑な刺突を行なう。42・43は「く」字状の括れ部があり、沈線と刺突による粗雑な珠文がめぐる。44・45は深鉢形の胴部である。46・47は蓋形土器であり、46には三叉状入組文を施している。いずれも研磨は入念であり、文様の中まで磨いている。48は珊瑚状の加飾を行なう皿器形の浅鉢形土器であり、加飾部には一対の穿孔が認められる。49は碗器形の浅鉢形土器であり、類例は少ないが、押水町上田うまばち遺跡に認められる。

第6群（第23図50・51）

50は碗器形の浅鉢形土器であり、縄文帯が二帯めぐる。51は皿器形の浅鉢形土器であり、内面に沈線がめぐる。

第7群（第23・24図52～55）

52・53は外反口縁の深鉢形土器であり、54では口唇部に縄文を施す。器面は撫で調整である。54も外反口縁の深鉢形土器であるが、器面全体に縄文を施し、頸部は横撫でにより縄文を撫で消して口縁部との間に段差を生じている。55は研磨の入念な波状口縁の浅鉢土器である。

これらはいずれも第3・4群に伴うものと考えられるが、特に54については、縄文を多用し、頸部の無文帯を意識している可能性があることから第3群に伴う可能性が高い。

③ 第2次地区出土土器

第1群（第24図56～60）

56は隆帯上に貝殻擬縄文を施す波状口縁の深鉢形土器であり、串田新式に比定される。

57は縄文を欠くが、富来町酒見新堂遺跡第一類Bに対比されると考えられ、58・59は羽状縄文をもつ土器であり、これらは酒見式に比定されるものと考えられる。60は綾衫状の沈線文をもつものであり、同様の時期のものと考えられる。

第2群（第24図61～82、第26図108）

61は口縁部内面に沈線と刺突を施す外反口縁の深鉢形土器であり、108は口縁部が内折し、口縁部に凹線がめぐる浅鉢形土器であり、ともに凹線文系土器である。62は波状口縁の深鉢形土器であり、陸帶上は縄文を施している。63～65は口縁部で屈曲する浅鉢形土器と考えられるものであり、63・64では、縦位の短沈線が五条程度施して単位化しており、65では族手状の沈線文と三叉文と考えられる彫り込みが認められる。第2群の中でも新相を示す土器である。66～68同様の時期のものと考えられる。69～75は口縁部で屈曲する深鉢形土器であり、八日市新保式に対比される。71・72は同一個体と考えられるものであり、縄文を多用し、75も同様であるが、口縁部下に沈線文を欠き、入念な作りである。第2群に含めているが、並製土器の範疇に含まれるものである。74は八日市新保式に比定される土器であり、これと極めてよく似た当遺跡の土器が『富山県史』考古編（268頁9）に掲載されており興味深い。77～80は椀器形の浅鉢形土器と考えられるものであり、81は注口土器である。82は口唇部に加飾帯がめぐる浅鉢形土器であり、八日市新保式に比定される。

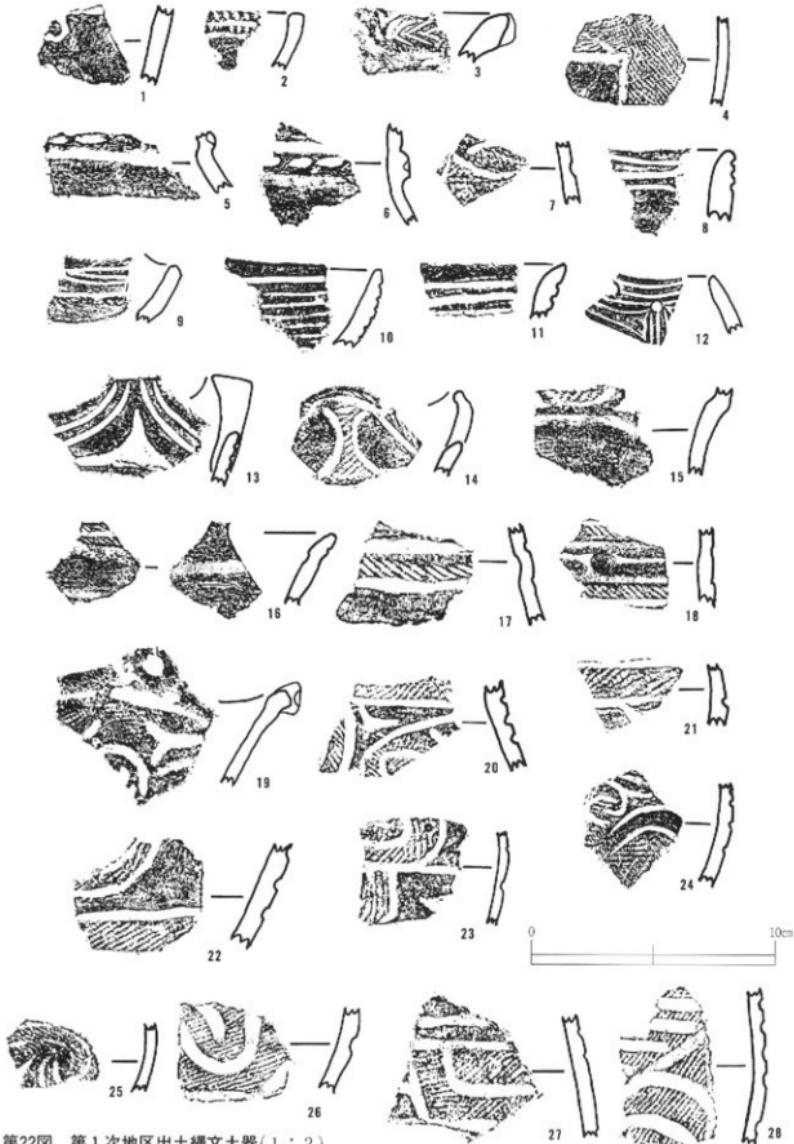
第3・4群（第24・25図83～94）

第3群に属するものは85・87・88である。85は半肉彫的な磨消部と三叉文の彫り込みをもつ典型的な岩瀬天神型の特徴を具備する。87は、入組帶縄文の入組部を三叉文が抱く意匠であると考えられ、大洞B1式に対比される。88は台付器形の脚基部であり、玉抱三叉文が認められる。

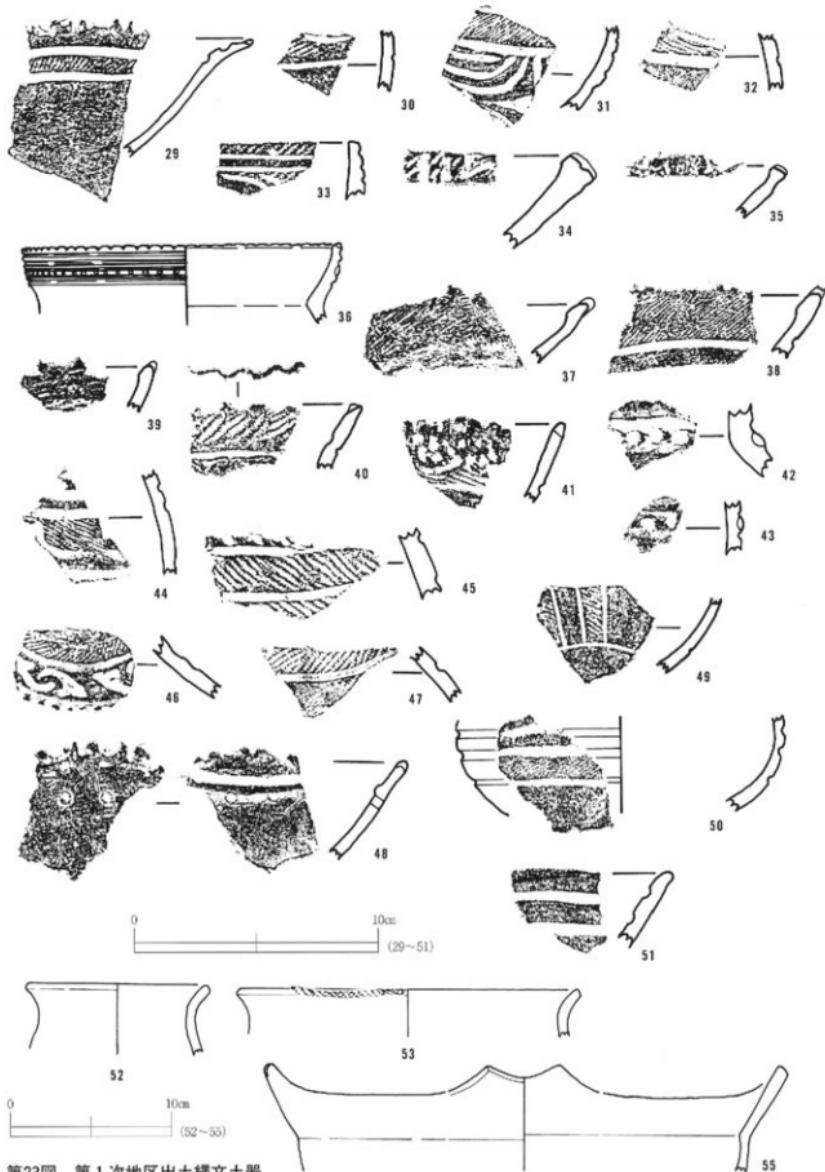
83は口唇部に加飾帯をもつ浅鉢形土器である。86は、入組紋を三叉文が抱く意匠は87と共通するが、入組紋は帶縄文とはならず、三叉文は沈線で描かれている。89は19と同様のものと考えられる。91は平縁であって外反口縁の深鉢形土器であり、口唇部は押圧によりさざ波状となり、口縁部内面に段をもち、縄文帯は内外面にめぐり、周囲を磨き潰すことにより、浮き出た印象を受ける。92も同様のものと考えられるが、口縁部内面に縄文帯を欠き、縄文帯は平面的である。93は口縁部内面に沈線が少なくとも四条めぐり、研磨が入念である。94は口縁端部内面に小さな段をもち、押圧がめぐるものであり、口縁部外面は縄文を施し、第5群に属する浅鉢形土器である可能性がある。95は磨消縄文を欠く深鉢形の胴部であり、沈線文は直線的な固い意匠である。96は縄文を欠き、沈線文は曲線的な柔らかい意匠である。

第5群（第25・26図97～105、第26図109・110）

97は羊歯状文をもつ注口土器であり、大洞BC式に比定される。98も大洞BC式に対比される羊歯状文をもつ深鉢形土器であるが、文様は直線的であり、固い意匠である。99は42・43と同様、粗雑な珠文が頭部をめぐるものであり、100・102は同じ文様で胴部の文様帯を構成している。101は沈線内に刺突を施すものである。103は三叉状入組紋をもつ深鉢形の胴部であり、中屋式に比定される。104は磨消縄文を伴う意匠不明の文様をもつものであり、第4群に属する可能性がある。105は口縁端部内面に加飾帯をもつ浅鉢形土器であり、粘土紐と粘土粒で加飾し、その下に一对の穿孔を施すものと考えられる。109は蓋形土器である。110は口唇部に突起と彫り込みにより加飾する皿器形の浅鉢形土器である。



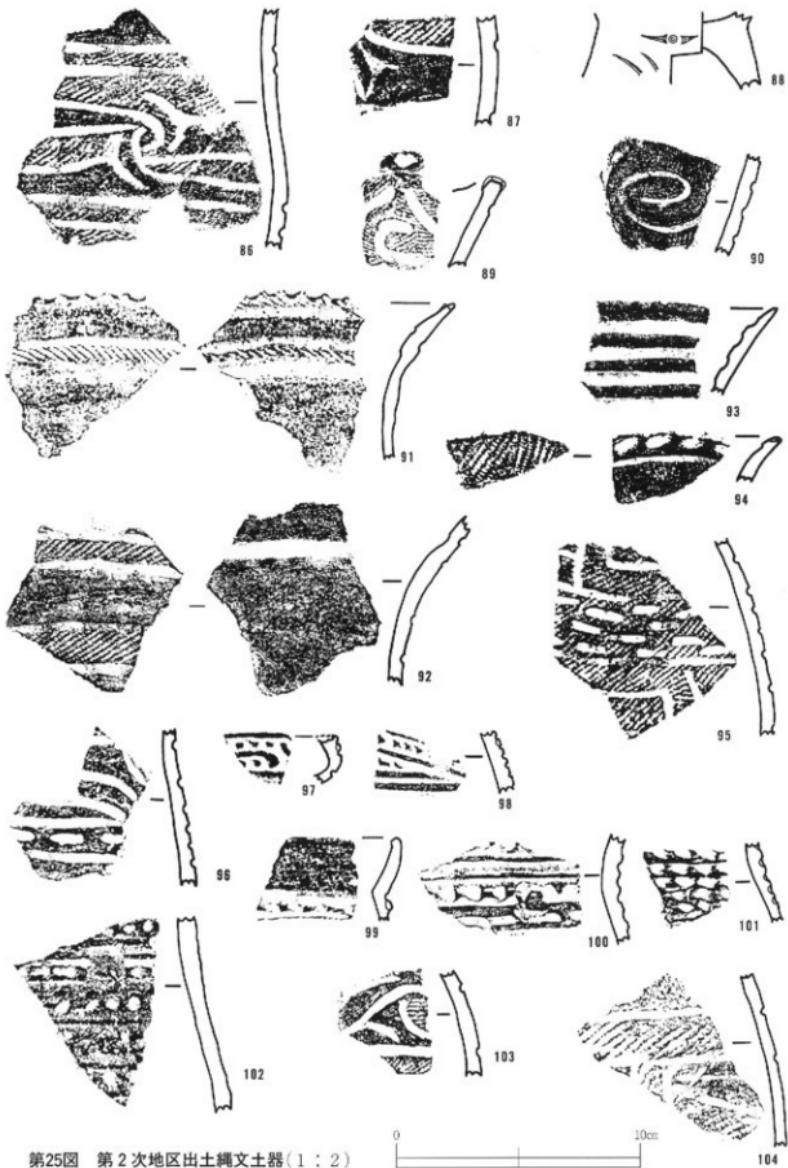
第22図 第1次地区出土縄文土器(1:2)



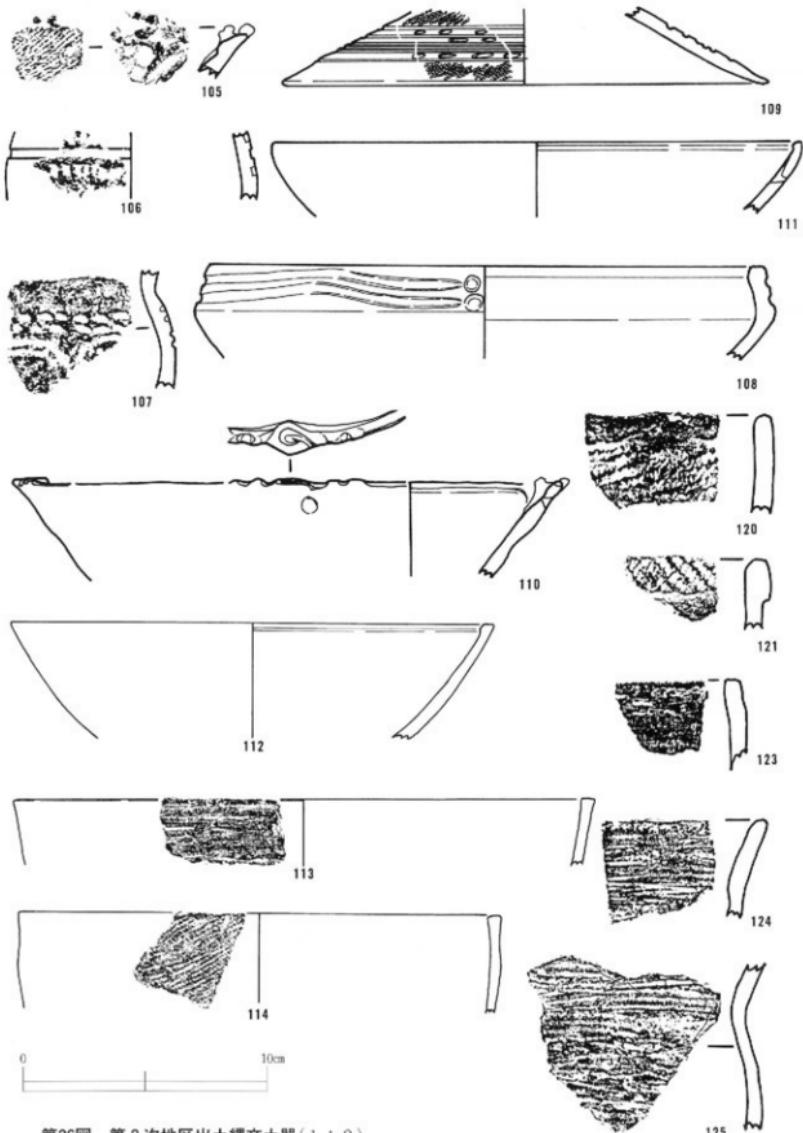
第23図 第1次地区出土縄文土器



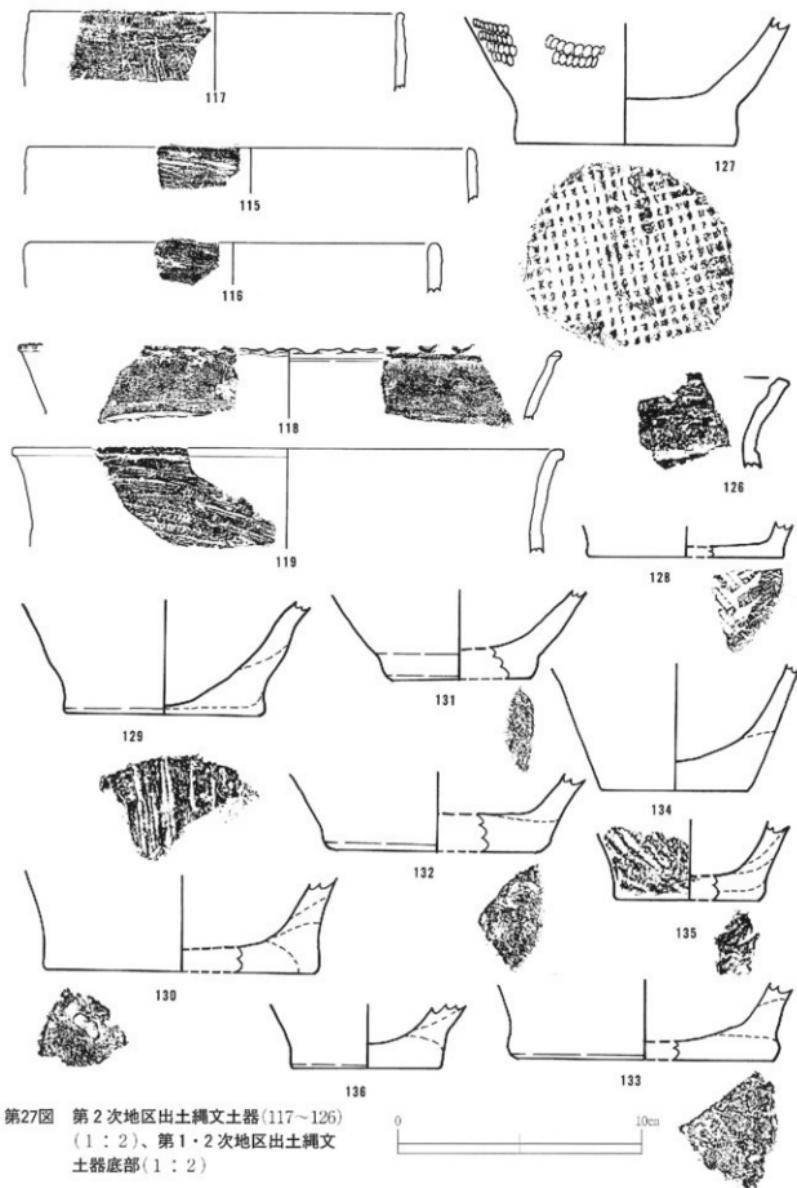
第24図 第1次地区(54)・第1次地区(56~85)出土
縄文土器(56~85は1:2)



第25図 第2次地区出土縄文土器(1:2)



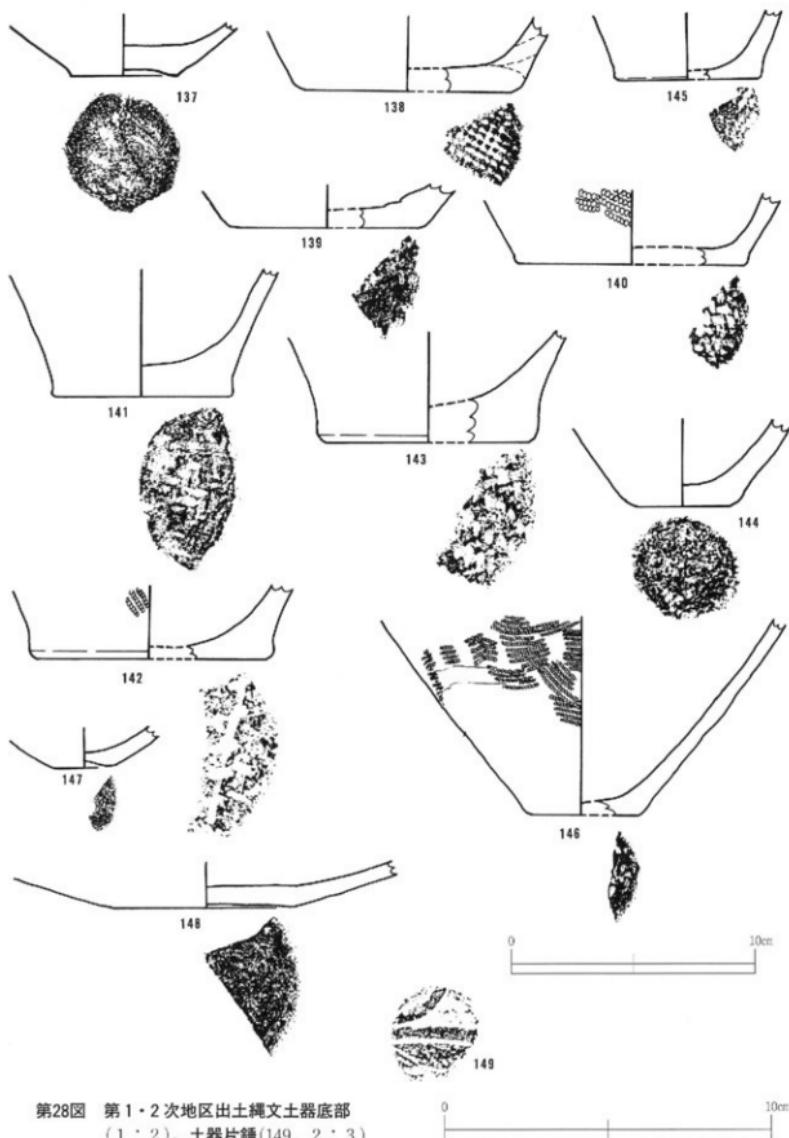
第26図 第2次地区出土縄文土器(1:2)



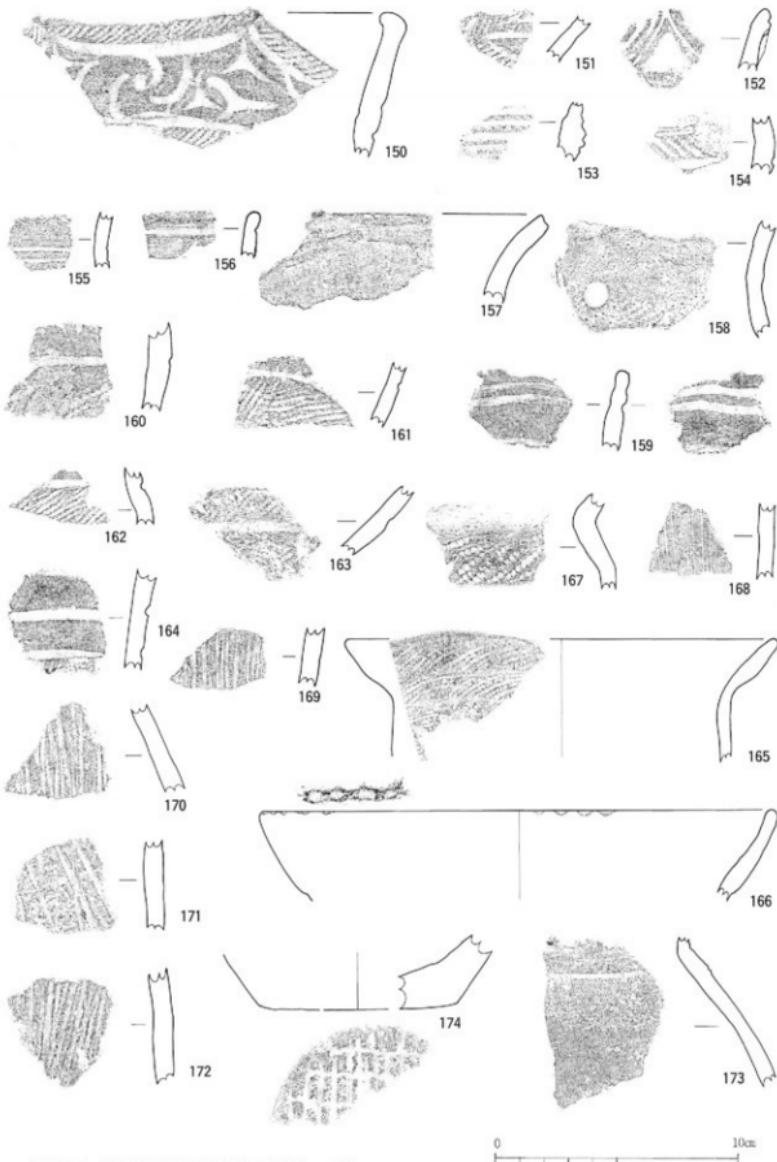
第2次図 第2次地区出土縄文土器(117~126)

(1:2)、第1・2次地区出土縄文

土器底部(1:2)



第28図 第1・2次地区出土縄文土器底部
(1:2)、土器片錐(149、2:3)



第29図 第3次地区出土縄文土器(1:2)

第6群（第26図106・107）

106は肩部に沈線と列点文をもつ小型の鉢形土器であり、沈線と列点の断面形は「コ」字状である。107は肩部に列点帯がめぐり、胴上部には梢円区画の工字状文を施すものと考えられる。東海・中部・北陸に分布する大地型精製壺に対比される可能性がある。

第7群（第26・27図111～126）

111・112は無文の皿器形の浅鉢形土器であり、器形は第4・5群のものに共通する。

113～117・120～123は直口口縁の深鉢形土器である。縄文：条痕の比率は1：2であり、時期的には晩期に属するものが主体と考えられる。確実に後期後葉に属するものは口縁部に肥厚帯をもつ121であり、本江遺跡の平縁深鉢O1型に対比される。

118・119・124～126は頸部で括れ、外反口縁の深鉢形土器である。器面は条痕・無文であり、縄文は認められない。118は口唇部に三角形の削去を施すものであり、第5群に伴うものと考えられる。

① 土器底部ほか（第27～28図127～148）

底部A類　圧痕をもつもの（127～129・138～145）

144は第5群に属する有文土器と考えられるが、それ以外は全て第7群に属するものと考えられる。128・139～145は網代圧痕をもつものであり、144については圧痕を撫でているため、わずかにそれらしい痕跡を残すことにとどまる。編み方は二本越え二本潜り・一本送りが主体であり、その他の編み方では、142がやや乱れているが一本越え・一本潜り一本送り、144・145に関しては編み方は不明である。その他、127・138はスダレ状圧痕、129は植物質の繊維の圧痕である。

底部はすべからく平底であるが、器壁の厚さに比して極端に薄く仕上げる129・142には留意しておく必要がある。

底部B類　圧痕をもたないもの（130～137・146～148）

130～136・146・148は平底であり、137・147は上げ底である。134・137・146～148以外は第7群に属するものと考えられる。137については第2群の範疇で西日本系の土器、146については第5群にそれぞれ属するものと考えられるが、それ以外については不明である。（宮田）

⑤ 第3次地区出土土器（第29図150～173）

第3群（150～152, 162）

150は直線的に外反する山形の波頂部をもつ。浅太い沈線で縄文帯と区分し、正を中心として放射状に延びる数本の沈線と、その両側に三叉文を3個固めて配置する。162は150と同一個体である。151は波頂端部を内湾させ、半肉形的な磨消部と三叉文の彫込みをもつ岩瀬天神型である。152は内湾する山形の小波頂部で、大きな三叉文を彫り込んだ下に2条の平行沈線を施す。

第4群（156）　平縁の深鉢で、細い沈線間に三叉文状の沈線を施す。

第5群（159）　口縁内外面に2本の深い平行沈線を引き、口唇部に小形のB字状突起を貼り付ける。

第7群（157, 158, 165～173）　縄文・条痕文が施されるものである。165は肥厚した口縁が短く外反する。外面にはLRの斜行縄文を施す。166は口唇部に列点を施し、外面は無文である。168～172は縦位の条痕である。

173は胴部球形の壺形を呈する。外面は丁寧に磨いている。

底部(174)スダレ状痕を残すものである。

土器片錐(第28図149、第32図205) 2点がある。149は、第3群に属する土器の波頂部の比較的肉厚な部分を利用している。2次P301出土。205は表面にRL縄文を施した土器片を利用したもの。径3.5cm、重量13.5gを量る。2次P323出土。

石鎌(第30図175) ハリ賀安山岩製の小型品で、無茎凹基である。2次P329出土。

石錐(第30図176) 鉄石英の貝殻状剥片を素材とする。1次P98出土。

削器(第30図177、178) 177は鉄石英の貝殻状剥片を素材とし、末端の一部に加工している。1次P109出土。178は玉觀の貝殻状剥片の2側縁に加工している。1次P95出土。

磨製石斧(第30図179) 刃部は3分の2が欠損する。刃部先端には使用による小剥離が残る。基部側の表面には柄装着に関連する光沢が認められる。安山岩製で、2次X99Y31出土。

打製石斧(第30図180～183) 短圓形のものがあり、いずれも折損している。石材は安山岩・凝灰岩・粘板岩を使用する。安山岩では自然縫から剥ぎ取った横長剥片を使用し、凝灰岩・粘板岩では板状節理面を残している。181は刃部先端が使用により摩滅し、長軸と約40度の角度をなす線状痕が残る。折損部の縫表皮側に力が加わって折損している。182は被熱している。1次P16, 107, 115出土。

石棒(第30図184～187) 4点がある。後～晩期の細形タイプで、いずれも折損・板状に剥離した破片である。石材に安山岩(184)・凝灰岩(185・186)・綠泥片岩(187)を使用する。186は被熱して黒化している。X44Y44, 1次P21、2次321, 323出土。

石皿(第31図188) 長楕円縫の1面にやや窪んだ平滑面をもつ。幅が狭く、むしろ砥石として利用されたかもしれないが、研ぎ方向はわからない。安山岩製。調査区内出土。

磨石(第31図189～193) 半たい円縫の両面に磨面を持つもの(190)、片面のみのもの(192)、厚みのある円縫の直交する2面に磨面を持つもの(185)がある。石材は花崗岩・角閃石安山岩で、193は被熱して割れている。1次P28, X44Y36, 2次P146出土。

敲石(第31図194～196、第32図197) 石材は角閃石安山岩・安山岩を使用する。長円縫の先端部を敲打面とする194、197、先端からやや側位へ寄った部分を敲打面とする195がある。196は小形で、長軸両端に敲打面がある。194は磨石の機能ももつ複合石器である。1次P112、2次P299出土。

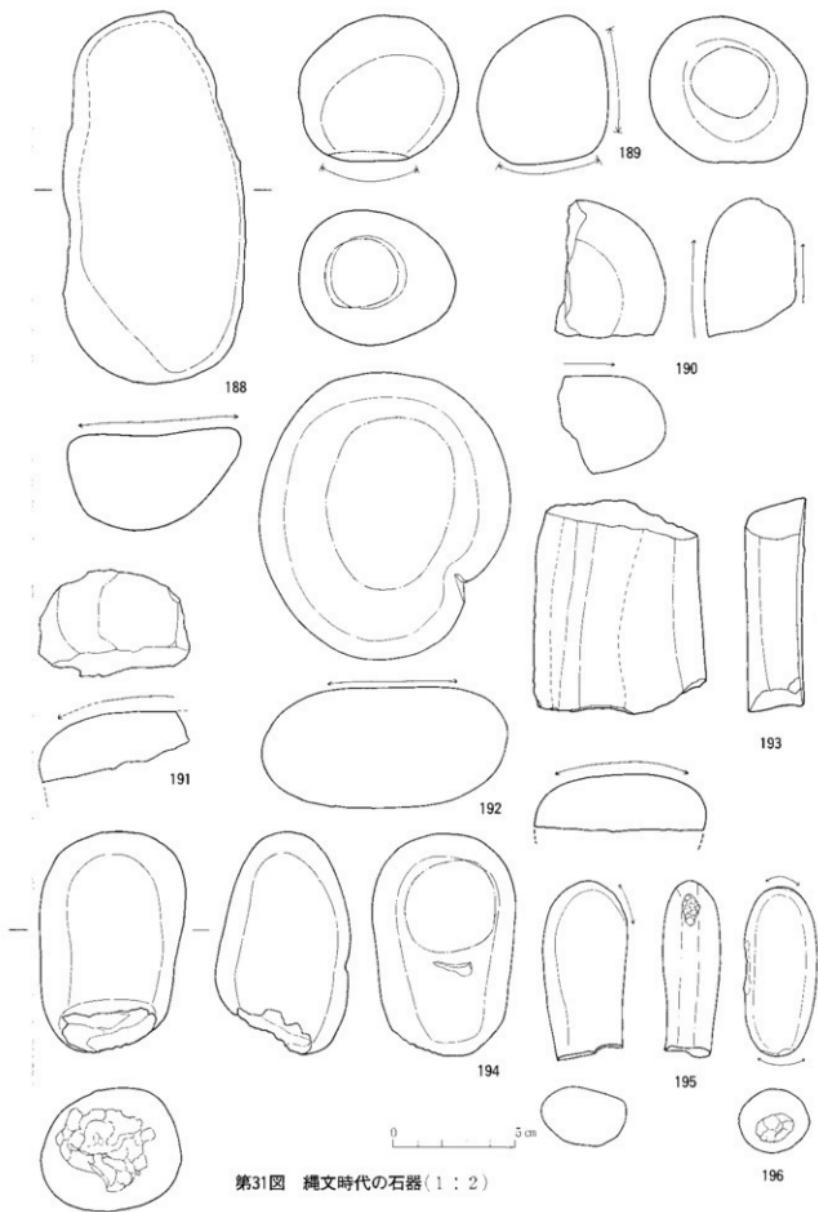
砥石(第32図198～204) 199～201は砂岩を用いた擦切用の板状砥石で、擦切石器と呼ばれるものである。199、200は長軸の両端を使用し、201は片側である。擦切部の断面形はU字または先端が丸みのあるV字形である。200は被熱して割れている。1次P13、2次P26, P318出土。

202は方柱状の安山岩の2面が砥面となっており、2面とも光沢を発している。被熱して割れている。1次P111出土。204は楕円柱状の安山岩質の石材で、2面が砥面となっており、線状痕・光沢がみられる。1次P3出土。203は凝灰岩の円縫の表面に複数方向の線状痕が認められる。2次P312出土。

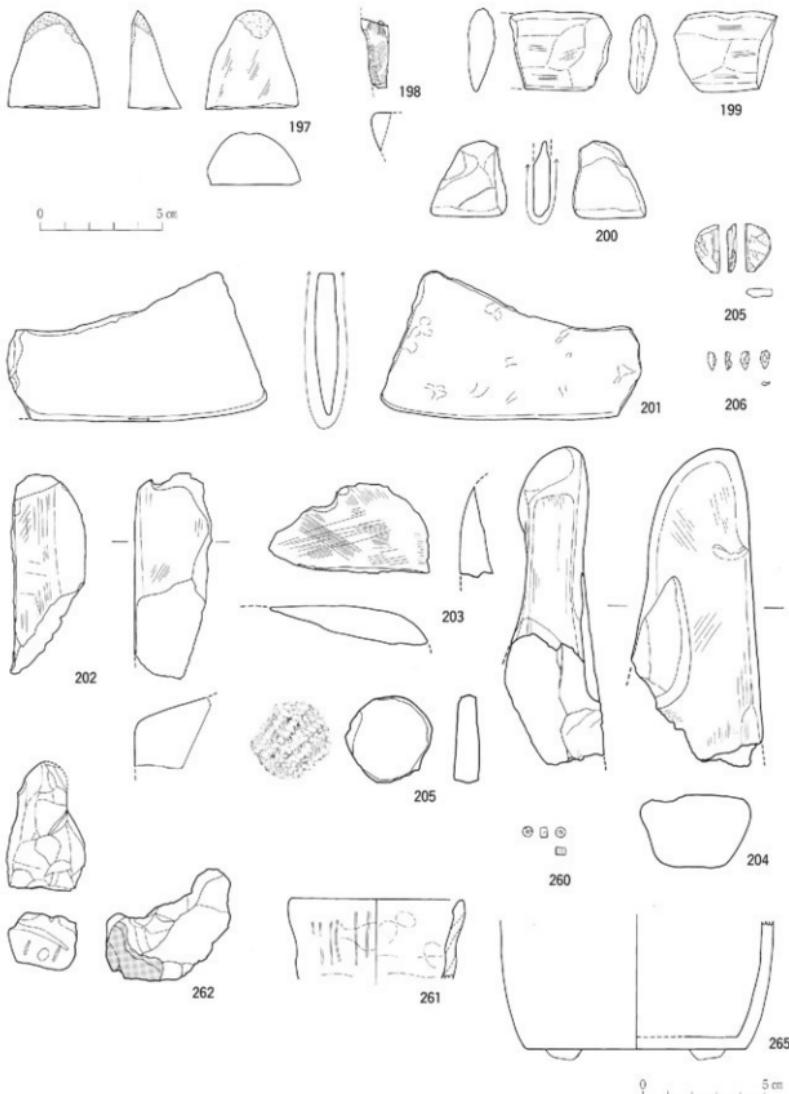
玉未成品(第32図205、206) 206はヒスイ製で穿孔途中のものである。楕円形状で、薄く剥落している。長8mm、幅3.7mmを測る。2次P305出土。205は半円形に磨いたもので、穿孔前のものである。一部ヒスイ質のある蛇紋岩である。長2.0cm、幅1.0cm、重さ1.15gを量り、縄文期のものと考えられる。1次P106出土。



第30図 縄文時代の石器 (175は1:1、それ以外は1:2)



第31図 桶文時代の石器(1 : 2)

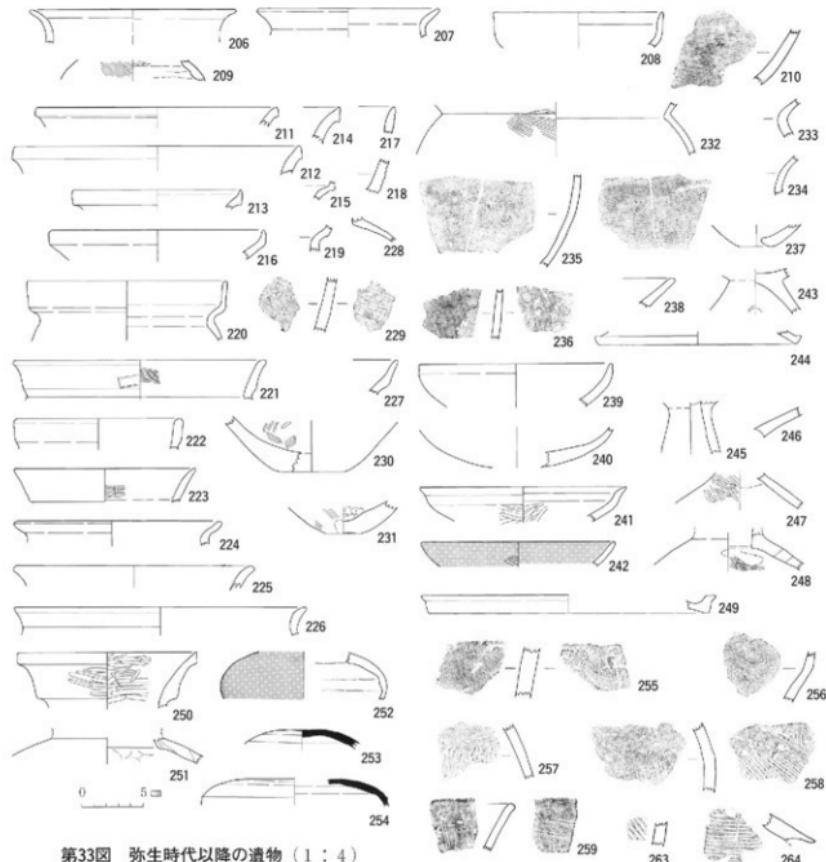


第32図 縄文時代の石器・土製品、古墳時代の臼玉、古代の土馬、
製塩土器(以上1:2)、近世の瓦質土器(1:4)

剥片類 玉髓、メノウ、鉄石英、チャート、流紋岩、黒曜石、蛇紋岩、碧玉の剥片・チップが各土坑から出土しており、総数34点になる。玉髓が最も多く、次いで鉄石英が多い。黒曜石3点は肉眼観察であるが魚津産のものである。
(古川)

(2) 弥生時代から古墳時代初めの遺物 (第32~35図)

甕 (206~229, 231~236) 口縁部が強く外反する206~207は器壁が薄く、口縁端部を薄くまるめるもので弥生時代中期後半とみられる。208は小形鉢状で口縁内面に段がある。211~214は外反する口縁端部を平らに面取りする。216は口縁端部が幅の短い有段とな



第33図 弥生時代以降の遺物 (1 : 4)

るもので、弥生後期前半とみられる。

217, 218は外傾する幅広の有段口縁に擬凹線を施す。220~222, 227は口縁がまっすぐまたは口縁端部が少し外反するもので、弥生後期後半とみられる。

223~226, 232~234はくの字に外反する口縁をもつもので、弥生時代後期から古墳時代前期とみられる。231は小さな底面を浅く凹ませる。235, 236は体部片で、内外面に横方向の細かいハケ目を施す。

甑（237） 底部に1孔があるので、底径3cm、孔径0.8cmを測る。弥生後期前半のものであろうか。2次P7出土。

高杯（238~249） 239~241は椀状の杯部である。242の杯部には内外面に赤彩を施す。243は脚部に3個と推定される円孔がある。248, 249は棒状脚の脚部とみられる。244は脚部の端部を面取りするもので、器台の可能性がある。

壺（230, 250~252） 250は有段口縁で、端部は外反して面取りする。古墳時代前期とみられる。252は台付壺の胴部でややつぶれた球形を呈し、外面に赤彩を施す。月影期とみられる。230は平らな小底面をもつ底部である。 （古川）

（3）古墳時代の遺物（第33図）

須恵器（坏蓋） 253は遺存率1/8程度で、灰色（Hue 5 Y5/1）を呈する。焼成は良好だが、胎土は粗い。ロクロの回転方向は反時計周りで、外面は回転ヘラケズリ、内面はロクロナデにより成形している。6世紀後葉から7世紀後葉。1次X58Y34下層包含層中出土。

254は遺存率1/12程度である。天井部と口縁部との境には稜をもつ。当該部分の直径は15.3cmである。黄灰色（Hue2.5Y5/1）を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。ロクロの回転方向は反時計周りである。外面は天井部の中心から2/3程度を回転ヘラケズリ、それより下はロクロナデにより成形している。天井部のロクロナデより下の部分には自然釉が付着している。回転ヘラケズリ部分には浅黄色（Hue2.5Y7/4）の砂粒が点々と付着し、その上には自然釉が付着する。この砂粒は重ね焼きの際の融着を防ぐためにまぶされたものと考えられる。内面はロクロナデにより成形している。陶邑古窯址群の田辺昭三氏編年（田辺1981）のMT15型式期（6世紀前半）に位置付けられる。1次P112出土。 （小黒）

土師器（256~259） 壺の外面は、口縁部は横方向のケズリやヘラナデ、体部は縦方向の粗いハケメを施す。内面はナデまたは斜め方向の粗いハケメとなる。胎土には砂粒を多く含む。6世紀後半頃のものとみられる。2次P157, 311, 323出土。

玉（第32図260） 滑石製の白玉で、径4.63mm、厚さ3.03mm、孔径1.73mmを測る。断面外形はやや丸味を帯びる。朝日町浜山玉作遺跡に類例があり、5世紀後半頃のものとみられる。2次P307出土。

（4）奈良・平安時代の遺物（第32, 33図）

製塙土器（第32図261） 口径7cmで、高さ3cmが残る。粘土接合帯を器面に残し、外面に縦方向の沈線状のハケメ？、内面に指頭圧痕を残す。器壁は5mm以下と薄い。胎土は緻密で細砂粒を多く含む。2次P301出土。

土師器（第33図255） 器種不明の土器破片である。器壁が厚く、内外面に粗いハケメを斜めに施す。年代も不明だが古代としておきたい。1次P39出土。

土馬（第32図262） 土師質土馬の尾部1点がある。胴体部分との境目は接合のための平坦面となっており、軸木痕が1カ所残る。尾はやや上向きとなり、先端部で跳ね上がる。

後足部分には剥落痕が残る。表面は後世の傷が多いが、帯状の凹面が認められることから、雲珠や尻繋が付いた装飾土馬であったと推定される。1次P110出土。

(5) 中世～近世の遺物（第32,33図）

珠洲焼（第33図263～264） 264は壺体部片で、頸部直下の部分である。1次P119出土。263は壺体部片で、1次P51出土。図示しないが外面に指頭での斜め方向の押引痕があり、内面は横ナデされる器種不明のものがある。1次P104出土。

瓦質土器（第32図265） 軟質の火消壺または火鉢である。体部径22.5cm、残存高11.5cmを測り、深さがある。体部外面は黒色で光沢を帯び、内面は暗褐色に焼けている。底外面には径3cm、高さ0.9cmの突起状の足がある。足先端は磨り減り、特に外側半分の摩滅が著しい。18世紀後半～19世紀とみられる。1次P12出土。

(6) 時代不明の遺物

骨 同定可能な9点のほか、31基のビットから微細な骨片が出土した。

同定の結果、被熱したヒト大腿骨片2点、焼けたニホンジカ右寛骨（臼部）1点、ニホンジカ右脛骨1点、カジキ類尾椎骨2点、マグロ類尾椎骨3点が確認された。いずれも遺構からは出土しておらず、新しい年代の可能性がある。

貝 卷貝1点があり、バイガイとみられる。X70Y31下層遺構検出面出土。他にカキがある。

種実等 同定の結果、コナラ属クヌギ節の子葉（2次P321）1点、ミズキ属の種実（2次P63）1点が確認された。

炭化物 ビットの多くから少量ずつ小炭化物片が出土している。ほとんどは木炭とみられ、同定によりクマシデ属イヌシデ節が確認されているほか、オニグルミ核裂片が1点1次P35から出土している。
(古川)

Vまとめ

1 遺構について

3回にわたる発掘調査によって砂丘上から多くの土坑群と土器類が出土した。遺物包含層としての黒色の腐植土はここではほとんど存在せず、遺構は不安定な砂の上に立地することが調査で明らかになった。

遺構検出面は、10～30cm程度のレベル差をもって3枚確認された。各面で検出された土坑は、いずれも直径の大小の差はあるものの、以下の点で共通性が認められる。

①土坑は一定間隔で規則正しく並び、総柱構造の掘立柱建物や塀・柵列などの柱穴配列に類似する。

②土坑は浅く、断面形は皿または椀状を呈し、覆土は単層またはレンズ状堆積を示す。

③土坑内出土遺物のほとんどは繩文土器であるが、弥生時代～中世の遺物をも含む土坑が少なからず存在する。

④遺物の出土状況に一定の法則は認められず、特に下層遺構ではほとんどの土坑から遺物が出土する。

以上の状況から、土坑の構築は中世以降であり、平面的配列からは中世以降に多出する縦柱構造の掘立柱建物および建物関連施設を想定しやすい。しかしそれぞれの土坑の示す状況からは柱が存在した痕跡を見出すことはできず、むしろ掘られた土坑を土器を包含する上で意図的に埋めたか、あるいは土坑に土器を包含する土が流入したものと理解すべき状況を示していることから、これらの土坑群は建物跡であると判断することはできない。

それではこのような規則性のある土坑群が構築される状況が牛じうるかであるが、1つの仮説として植林・育苗跡が考えられる。湊辰氏の聞き取りでは昭和10年頃に行われていた植林は小松の周りを四角く竹などで囲み、その中に誕生の黒色土を入れていたということで、調査で検出された土坑形状の成因にはなりにくいと考えられるが、検出された円形状の土坑はおそらくそれ以前に行われたものの痕跡であろう。土坑は列状配置という性質が強くうかがえ、建物でいう桁方向と梁方向が直交しないものも見受けられる。以上のことから、張り繩などを行って規則的に配列した小松の植林や松苗育成などの状況を想定したほうが良いと思われる。このような植林や育苗が3回程度行われたものとみられる。それぞれの間層に遺物を包含する黒色腐植土が全く介在せず、地山と同じ砂が堆積することも現在のような砂丘地において行われた行為であったことを裏付けており、上記のような状況を理解する傍証となっている。

(古川)

2 「岩瀬天神型」土器について

(1) 評価の現状

「岩瀬天神型」あるいは「岩瀬天神式」と呼ばれる土器群は、富山県東部を中心に分布する、いわば北陸東部型の土器群であり、古くから注意が払われてきた。現在までに確認されている器形は波状口縁の深鉢形のみであり、この点は、今回の二度の発掘調査でも同様である。岩瀬天神型が単独で土器の組成をなさいことについては、出崎政子氏が既に指摘しており、近年では、酒井重洋氏が「岩瀬天神式」の扱いに慎重な立場を表明していることから、本稿では、引用文を除き、「岩瀬天神型」と呼称を統一した。

岩瀬天神型の縦的な位置付けについては、出崎氏が「大洞B1式土器に至るまでの間を埋める土器群」として後期末に位置付け、北陸西部との関係については、「井の口以後八日市新保式までの間の一群」と対比した。今日的には八日市新保I式をさすものと考えられる。これを受けて湊氏は、その後の発掘調査により得られた魚津市石垣遺跡の類例を岩瀬天神型に先行するものと捉え、「岩瀬天神型は晩期初頭と考えたい」との見解を示し、以後この位置付けが繼承される。

この当時、北陸西部の晩期初頭に位置付けられていた八日市新保式には併行する時期の北陸東部には勝木原式が設定されていたが、その後北陸西部においても、勝木原式の指標の一つである玉抱三叉文をもつ土器群が注目されるようになり、西野秀和氏が「東北地方との関わりが土器に反映するのは勝木原式土器」と捉え、八日市新保II式（従来の八日市新保式）を後期末に位置付ける見解を示すに至ると、八日市新保II式→勝木原式という縦年の序列が与えられることとなり、結果的に岩瀬天神型の時期の北陸西部に空白が生じることとなった。この翌年、久田正弘氏は八日市新保I・II式を二期に分けて、ほぼ八日

市新保Ⅱ式に相当するⅡ期に岩瀬天神型を併行させ、Ⅲ期と御経塚式Ⅰ期を勝木原式に併行させる編年案を示した。しかしながら、この編年案は富山県では受け入れられなかつたようであり、酒井氏が朝日町境A遺跡の上器を報告した際、「富山県下では、晚期初頭から前葉に岩瀬天神式、勝木原式、御経塚式、中屋式が設定されている。(中略) 岩瀬天神式期が富山県下にあり、石川県下には同期の土器形式がないのである」と述べている。

翌年、酒井氏は境A遺跡の資料により、三叉文の出現から玉抱三叉文の成立・解体までを七段階の変遷の中で説明し、晚期の始まりを第1段階と第2段階の間に求め、岩瀬天神型は第2～4段階の資料を含み、勝木原式の主体を第4段階に位置付けている。さらに二年後、小島俊彰・西野・酒井の三氏は北陸の東部と西部における後期後半から晚期中葉にかけての統一的な編年を発表している。この中で北陸東部を担当した酒井氏は、従来の岩瀬天神型を勝木原・御経塚1式(勝木原式)に位置付け、「勝木原式に先行する型式を岩瀬天神式とするならば」と述べた上で、濱氏が岩瀬天神型に先行するものと捉えた石垣遺跡例と、本江遺跡の波状深鉢J11型や注口壺H型に含まれる資料を「岩瀬天神式」として提示している。これには、北陸の東部と西部の編年観の矛盾を解消する意図があったと考えられるが、岩瀬天神型を除外した土器群に対して「岩瀬天神式」という型式名を冠することについては、「岩瀬天神式」と「岩瀬天神型」の間で内容の不一致が生じ、問題があると考える。

(2) 岩瀬天神型の定義について

岩瀬天神型については出崎氏と濱氏がその指標となる属性について述べているが、両者の説明を総合すると、①半肉彫的な磨消部と浮き出た感じの縄文部 ②内側にひねりを加える器内に有段の波頂部 ③四単位の波状口縁 ④頸部の無文帶 ⑤入組縄文と未発達な三叉文 ⑥左右非対称の文様 ⑦巻き込み文様 とまとめることができる。酒井氏はさらにこれに、⑧単位数の多い波状口縁 ⑨左右対称の文様 を指摘し、特に⑨について、⑥とともに二系統の並立を指摘した。このうち⑥について出崎氏は晚期初頭の様相を示すものも存在することを指摘している。また、③・④について西日本的な要素であることも指摘している。なお、東日本的な要素として挙げられる①・⑤については、前者は瘤付土器に顕著な特徴であり、後者は瘤付土器終末から大洞B1式にかけての様相と一致するものと考えられる。瘤付土器は北陸東部でも一定の分布が知られ、またこれに併行する在地の土器には①の手法は認められないであり、したがって瘤付土器の手法を在地の土器に取り入れて成立するのが岩瀬天神型であると考える。

以下、①～⑦についてを狭義の岩瀬天神型、①～⑨についてを広義の岩瀬天神型とするが、特に①～④については、これらの条件を満たさないものは、狭義の岩瀬天神型から除外して扱うものとし、①を満たさないものについては、広義の岩瀬天神型からも除外するものとする。

(3) 岩瀬天神遺跡発掘調査資料から

上述のような定義により、広義の岩瀬天神型として抽出することができる資料は、第1図14～16・18、第6図85である。これらのうち、文様意匠から狭義の岩瀬天神型に含まれると考えられるのは85のみであり、①・④・⑥を満たす。類例から、②・③も満たすと考えてよいであろう。

他の資料では、14は波頂部に出現頻度の高い三叉文を欠き、①・②・⑨を満たす。

15は口縁部文様帶に玉抱三叉文を施し、④・⑨を満たす。16は口縁部内面に有段であり、波状口縁である可能性があり、②・④を満たすと考えられる。18は胴部文様帶に連結三叉文を施し、①・⑨を満たす。これらは、いずれも広義の岩瀬天神型に含めてよいものと考える。しかしながら、厳密には岩瀬天神型の範疇からは外れるものであり、特に18については、北陸西部の八日市新保II式の影響が強く表れている。

(4) 岩瀬天神型の編年的位置付けについて

本稿において①～④に特に注目したのは、小林達雄氏が説明するような「土器の形態にみられる物理的な属性・要素についてみると、個体間にきわめて強い共通性を認めることができる」型式として岩瀬天神型を捉えるならば、①～④はこの「強い共通性」を示す属性であると考えたからである。これらのうち、②～④については北陸西部の土器にも認められる属性であり、八日市新保II式が該当する。両者で異なる点は、岩瀬天神型は縄文を多用することであり、例、口縁部文様帶と胴部文様帶以下は全面に縄文を施す。これは、北陸東部の土器が後期後葉以来もつづける属性であり、後期後葉以来の伝統をここからもうかがうことができる。したがって、岩瀬天神型は後期後葉の特徴をもつことになるが、これに対して、岩瀬天神型を晚期初頭に位置付ける根拠となる属性は⑤であり、これは岩瀬天神型が新たに獲得する属性である。これを瘤付土器終末と見るか大洞B1式と見るかは、直接比較することが困難であることや、研究者間の認識も必ずしも一致していないようであるので、明言は避けることにすると、⑤の特徴は、青森県弘前市十腰内遺跡第VI群や福島県須賀川市一斗内遺跡I期11段階などに、ほぼ対比されるものと考える。

したがって少なくとも狭義の岩瀬天神型については、北陸西部の八日市新保II式と連関性をもち、東北地方とは、後期末とするか晚期初頭とするか時期的に微妙な段階に位置付けることができると考える。広義の岩瀬天神型については、本稿においても漠然として新たな定義も行なっていないので、明言はできないが、①の手法に関しては勝木原式の段階まで存続するものと考える。これに後続する段階としては、磨消縄文を欠く第1図19・第6図89、磨消縄文を施すが①の手法を欠く第1図20～25・第6図86のようなものが相当するものと考えたい。
(宮山)

3 まとめ

発掘調査において検出した土坑群は、検討の結果、縄文時代に属するものでなく、中世以降の植林・育苗跡と推定された。すなわち出土した縄文時代遺物は原位置を遊離した二次堆積の遺物である可能性が高い。元來の遺跡の位置は「さんまい」と呼ばれていた県道南側地点で、そこから土器を含んだ土をここまで運んだものと推測される。しかし植林・育苗の痕跡である確証はなく、あくまで可能性にすぎない。現状では二次堆積によるものの可能性が極めて高いとするとにとどめておきたい。

本遺跡を標式とする「岩瀬天神式（型）土器」の内容については、遺物の項で検討したとおり今回調査で出土した土器のうちこの型式に含まれる土器の内容が希薄であり、文様などの十分な検討をとおして検証することはかなわなかった。

出崎氏が仮称岩瀬式として位置づけた「入組み縄文と未発達な三叉状文」をもつ一群を後に岩瀬天神式（型）としたが、その後の編年や境A遺跡などでの検討では、玉抱き三叉文と並行関係にあるとする見方が主流になってきている。しかし宮田氏の検討のように後

期後半の影響を強く受けて成立する文様であり、石川県における御経塚式の中に少数ではあるがこの型式の文様が存在すること、さらに勝木原式の標式的な「玉抱き三叉文」は型式学的な検討から岩瀬天神式（型）にみられる三叉文より後出的であり（南2001）、岩瀬天神式（型）には典型的な玉抱き三叉文がほとんど存在しないことなどから、地域性を考慮しつつも、「岩瀬天神式（型）」は本当に成立しないのかを改めて問い合わせる必要があると考える。

経過でも述べたとおり、整理作業が終了した頃、幸いにも濱辰氏の全採集資料を実見し、その大半について観察・図化することができた。しかし紙数の関係からこれらを掲載し全体を検討することはできなかった。上に述べた課題について、濱氏採集資料の再検討を通じて明らかにしていくべきであると考えており、別の機会に改めて報告したい。（古川）

参考文献

- 井口村教育委員会 1980 「富山県井口村井口遺跡発掘調査概要」
江戸遺跡研究会編 2001 「岡越江戸考古学研究事典」柏書房
岡崎卯一 1972 「50 ちょうちょう塚」『富山県史 考古編』富山県 p159-161
岡崎卯一 1976 「第二節 純文化の諸相」『富山県史 通史編I 原始・古代』富山県 p99-112
鹿島昌也 1997 「富山市の遺跡9 百塚住吉D遺跡」『富山市考古資料館報』第31号 富山市考古資料館
館 p8
久保尚文・高岡徹 1980 「富山県」「日本城郭体系7 新潟・富山・石川」新人物往来社
小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994 「北陸の土器編年—後期後半—晩期中葉—」『撫紋晩期前葉—中葉の広域編年』研究代表者林謙作 p42-49
小島俊彰 1987 「第2章 繩文時代」「富山市史 通史上巻」富山市 p72-79
駒見和夫 1980 「「ちょうちょう塚」をめぐる問題」『富山市考古資料館報』第3号 富山市考古資料館
p6-8
塙照夫 1972 「富山県の歴史 越中の古城」
高岡徹 1996 「中世の広田」「広田郷土史」
高瀬重雄監修 1994 「富山県の地名」日本歴史地名大系16 平凡社 p479
田辺昭二 1981 「須恵器大成」角川書店
出崎政子 1967 「北陸地方の繩文時代晚期について(I)」「大境」第3号 富山考古学会 p1-12
富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
富山県埋蔵文化財センター 1989 「富山県埋蔵文化財センター年報 昭和63年度」
富山県埋蔵文化財センター 1993 「富山県埋蔵文化財センター年報 平成4年度」
富山県埋蔵文化財センター 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」
富山県埋蔵文化財センター 1994 「富山県埋蔵文化財センター年報 平成5年度」
富山県埋蔵文化財センター 1996 「富山県埋蔵文化財センター年報 平成7年度」
富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ
富山考古学会 1999 「富山平野の出現期古墳 発表要旨・資料集」
富山市教育委員会 1974 「富山市農田遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 1976 「富山市遺跡地図」
富山市教育委員会 1984 「富山市吳羽山丘陵古墳分布調査報告書」
富山市教育委員会 1988 「B 江代割遺跡」「昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要」p14-24

- 富山市教育委員会 1989 「F 岩瀬天神遺跡、G 日方江遺跡」『昭和63年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要』 p16-21
- 富山市教育委員会 1993 『富山市遺跡地図(改訂版)』
- 富山市教育委員会 1998 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ 四方北窪遺跡』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 四方北窪遺跡』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市四方背戸削遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2000 『富山市四方北窪遺跡』
- 富山市教育委員会 2000 『第1回奈良時代の富山を探るフォーラム資料集 フォーラム古代の道と駅』
- 富山市教育委員会 2001 『第2回奈良時代の富山を探るフォーラム資料集 フォーラム古代北陸の国と郡の成り立ち』
- 富山市教育委員会 2001 『富山市百塚住古遺跡発掘調査報告書』
- 早川莊作 1941 「富山市東岩瀬町發見彌生式土器」「古代文化」20-7
- 早川莊作 1943 「富山市東岩瀬町發見彌生式土器に就て」「富山県史跡名称天然記念物調査報告」第15輯
- 早川莊作 1936 『越中史前文化』中田書店
- 藤田富士夫・騎見和夫 1981 「ちょうどちょうど塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会 p53-73
- 藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡13 富山』保育社 p194
- 藤田富士夫 1989 『考古学ライブラーー52 玉』ニュー・サイエンス社
- 藤田富士夫 2000 「古代北陸道を復元する」「高岡市埋蔵文化財展2000 万葉時代の高岡を語る考古学 フォーラム資料』
- 古川知明 2001 「越中岩瀬淡周辺の考古学的調査から」『富山市岩瀬・水橋バイ船フォーラム2001 発言要旨パネリスト集』
- 堀沢祐一 2001 「越中国の律令祭祀と官衙遺跡」「第2回奈良時代の富山を探るフォーラム資料集 フォーラム 古代北陸の国と郡の成り立ち」富山市教育委員
- 渕 春 1935 「越中に於ける陸奥式土器」「考古学」6-2 東京考古学会 p98-106
- 渕 春・出崎政子 1967 「岩瀬天神遺跡出土の特異な土製品」「大境」第3号 富山考古学会 p43-44
- 渕 春 1972 「五 繩文後・晚期」「富山県史 考古編」富山県 p48-56
- 渕 春 1972 「28 岩瀬天神遺跡」「富山県史 考古編」富山県 p141-142
- 渕 春 1992 「10代の思い出」「大境」第14号 富山考古学会 p1-8
- 渕 春 1994 「岩瀬天神遺跡」「富山大百科事典」上巻 北日本新聞社 p159
- 宮田 明 1995 「富山市岩瀬天神遺跡出土の繩文土器について」「富山市考古資料館紀要」第14号 p1-19



1946(昭和21)年 米軍撮影 岩瀬周辺空中写真



1993(平成5)年 国土地理院撮影 空中写真



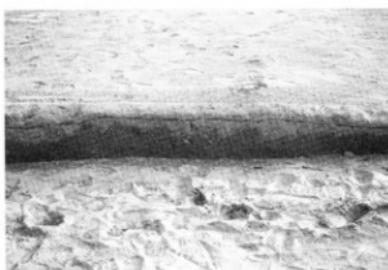
発掘調査区(南から) 第1次調査時



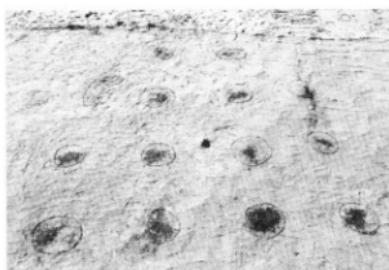
第1次地区全景(上層遺構) 右が北



第1次地区調査前(東から)



第1次地区土層(X46Y40)



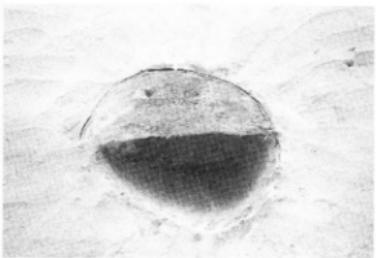
第1次地区上層遺構検出状況(東から)



第1次地区上層遺構(北から)



第1次地区下層遺構(東から)



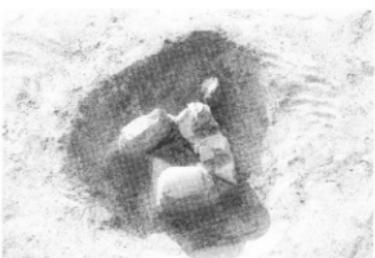
上層遺構P41土層(東から)



下層遺構P113土層(東から)



上層遺構P3遺物出土状況(東から)



上層遺構P18遺物出土状況(東から)



上層遺構P16遺物出土状況(東から)



下層遺構P98遺物出土状況(東から)



下層遺構P114遺物出土状況(東から)



下層遺構P119遺物出土状況(西から)



第2次地区上層遺構(南から)



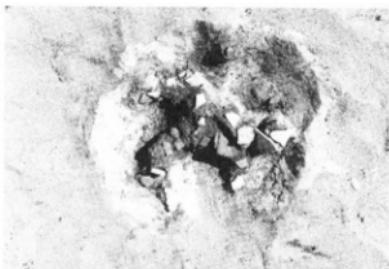
第2次地区上層及び中層遺構(東から)



第2次地区下層遺構(東から)



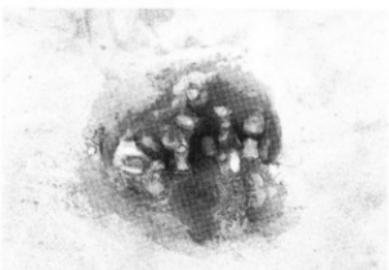
第2次地区下層遺構(南から)



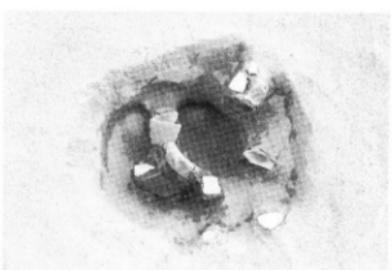
上層遺構P139遺物出土状況(東から)



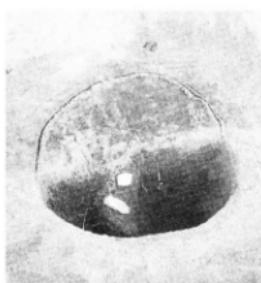
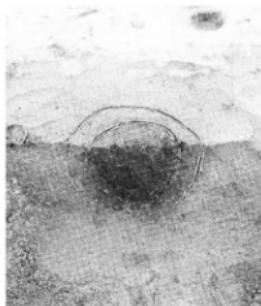
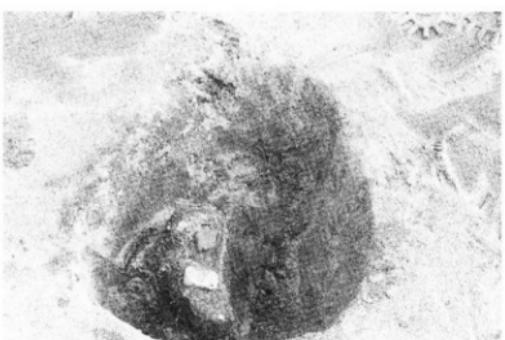
上層遺構P142遺物出土状況(北から)



下層遺構P311遺物出土状況(北から)



下層遺構P318遺物出土状況(北から)

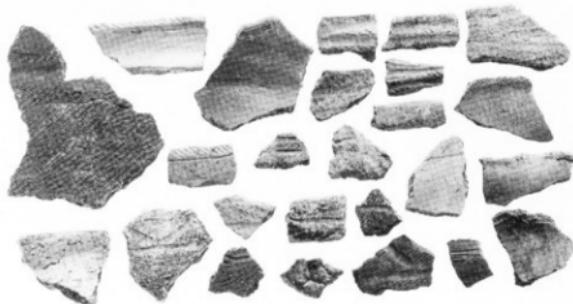




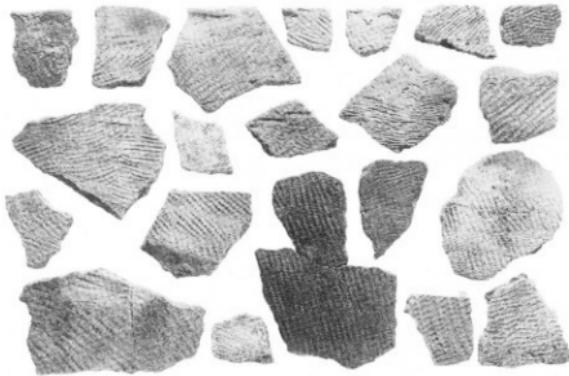
第1次地区縄文土器
1~24



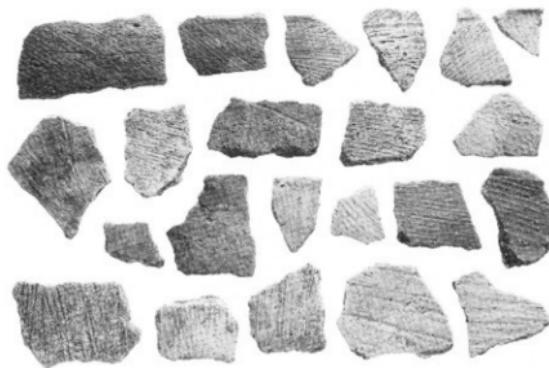
第1次地区縄文土器
25~51



第1次地区縄文土器
53~55及びその他



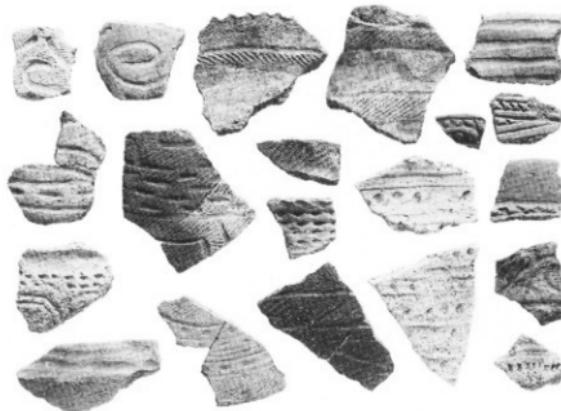
第1次地区绳文土器
绳文



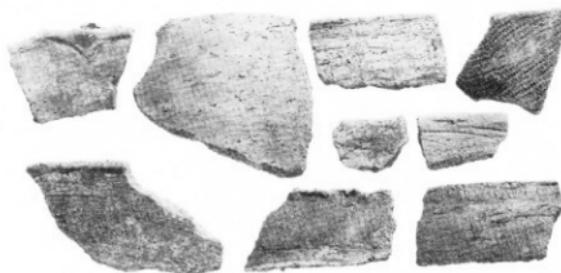
第1次地区绳文土器
条痕文



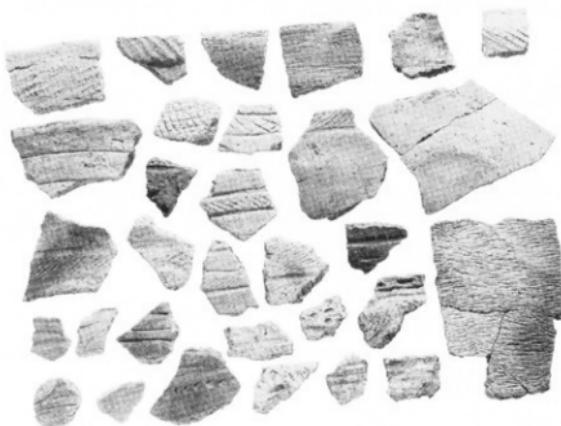
第2次地区绳文土器
57~88



第2次地区縄文土器
89~109



第2次地区縄文土器
110~119



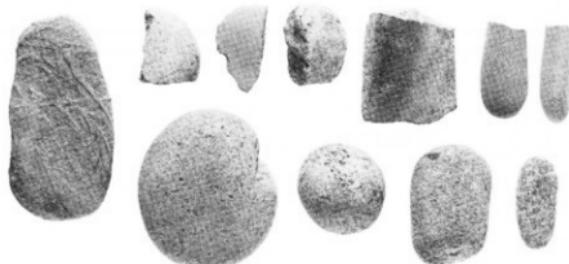
第2次地区縄文土器
その他



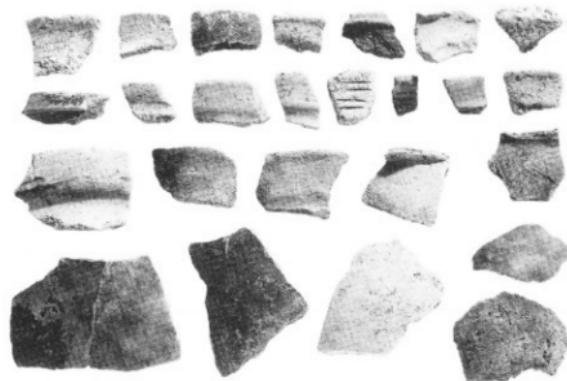
第3次地区縄文土器
150~173



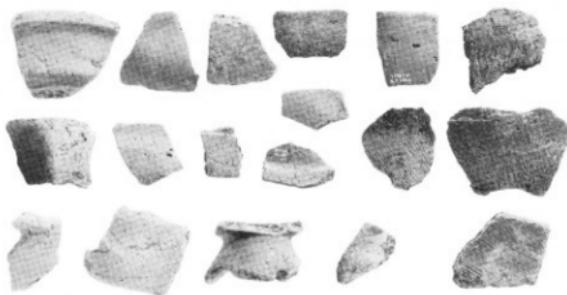
第1~3次地区
縄文時代石器
176~186, 205, 206



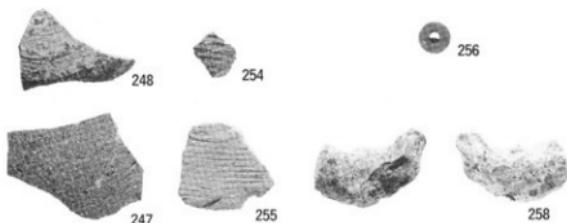
第1~3次地区
縄文時代石器
188~204



第1～3次地区
弥生～古墳時代の土器
206～231



第1～3次地区
弥生～古墳時代の土器
232～255



古墳時代～中世の遺物
須恵器、白玉、土馬、珠洲焼

報告書抄録

ふりがな	とやましいわせてんじんいせきはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書								
副書名	富山市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	121								
編著者名	古川知明・宮出明・小黒智久								
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター								
所在地	〒930-0803 富山市下新本町5番12号 TEL.076-442-4246								
発行年月日	西暦 2002年3月28日								
所取遺跡名	ふりがな	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	特記事項
岩瀬天神遺跡	とやましいわせてんじんいせき	富山市岩瀬古志町	16201	001	36度 45分 30秒	137度 14分 30秒	1次 1992/10/8～1992/12/1 2次 1993/9/16～1993/11/9 3次 1995/10/23～1995/12/6	1,335	県営海岸整備計画 に沿った遺跡
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物					
岩瀬天神遺跡	縄文				縄文後期土器、縄文晚期土器、土器片鍾、石鏡、石椎、石皿、磨石、鐵石、打製石斧、磨製石斧、石舞、石棒、玉類、玉未成品、石棒、剥片、骨器、中前期土器、弥生後期土器				
	弥生				須恵器、土師器、土器片鍾、青磁、环球燒、瓦質火鉢				
	古墳				中世土師器、青磁、环球燒、瓦質火鉢				
	奈良・平安				骨、貝、種籽（クヌギ・不明）、木炭				
	鎌倉～室町								
	不明	土坑群							

調査参加者

第1次調査 1992, 10, 28～1992, 12, 21

大泰司 純、大知正枝、大平愛子、尾野寺克実、海道順子、亀井 聰、河合君近、河合 忍、
榎原滋高、島崎久恵、高橋浩二、武田昌明、中田書矢、中村大介、野中由希子、長谷川幸志、
福海貴子、松田留美、松原和也、松山温代、宮田 明、柳沼弥生（以上富山大学学生）

第2次調査 1993, 9, 16～1993, 11, 19

石井淳平、稻石純子、岩崎聟尋、内田亜紀子、大川 進、大泰司 純、大知正枝、大平愛子、
大平奈央子、尾野寺克実、小島浩之、近藤美紀、勾坂友秋、佐藤聖子、塙田明弘、鈴木和子
滝寿美代、田中慎太郎、田中幸生、角田隆志、坪田聰子、中田書矢、古沢亜希子、古屋聰洋、
堀内大介、三林健一、宮田 明、向井裕知、米出敬子（以上富山大学学生）
高橋浩二（以上富山大学大学院生）

第3次調査 1995, 10, 23～1995, 12, 6

井出口恵美、大平奈央子、小幡鮎子、海道雅子、景山和也、金成淳一、小島あずさ、小林香織、
近藤美紀、佐藤 慎、鈴木由紀、須田雅昭、滝寿美代、田中慎太郎、塙田和也、戸田美子、
柄谷朋子、戸簾暢宏、中島和哉、中島義人、中谷正和、西村倫子、野水晃子、早川さやか、
平井晶子、堀内大介、宮崎順一郎、本村 衛（以上富山大学学生）

富山市埋蔵文化財調査報告121

富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書

2002(平成14) 年 3月28日発行

発行 富山市教育委員会
編集 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0803
富山市下新本町5番12号
Tel 076-442-4246
Fax 076-442-5810
E-mail : maizoubunka01@city.toyama.toyama.jp
印刷 富山スガキ株式会社

